

道

求



第  
參  
號

第  
拾  
卷



求道第拾卷第參號目次

求道

●聖人の面影

●善知識の恩

講義

●『教行信證』信卷三信釋

近角常觀

第六席

信樂釋(專修念佛の意義)

告白

●懈怠勝ちと思はせて頂くと亦格別有難い

丸尾猪太郎

●佛智不思議

講話

(親鸞聖人の消息)

近角常觀

毎日曜午前九時

求道學舎

(本郷區藤川町一帯地)

毎土曜午後二時

第二求道會

(九段坂佛教俱樂部)

毎月二日午後七時

第三求道會

(日本橋區深町説教所)

求道

第十卷  
第三號

聖人の面影

聖人の御面影はいかゞましましたであらう、平素いたゞきて居るところを描きたてまつりて見よう。聖人の眞面目を最もよくあらはしたる御言葉は、

不<sub>レ</sub>得<sub>三</sub>外現<sub>ニ</sub>賢善精進之相<sub>ヲ</sub>内<sub>ニ</sub>懷<sub>ニ</sub>虚假<sub>ナ</sub>

の一語に盡されてあると思ふ。私は常に此一語を誦するときには、擧げとして聖人の御姿があらはるゝ様に感ずる。實に此一語は聖人の信仰を盡したるのみならず、其信仰の儘が聖人の御行狀の上に躍如としてあらはれたる有様が、歴々として見るが如くである。隨て眞宗の眞面目が生々としてあらはれてある語である。

今更事新らしく陳べたてる必要もなければ、順序として解説を試みねばならぬ。是即ち善導大師の『散善義』の至誠心の釋にして、通常の讀み方としては

不<sub>レ</sub>得<sub>下</sub>外現<sub>ニ</sub>賢善精進之相<sub>一</sub>内懷<sub>中</sub>虚假<sub>上</sub>

といふのである。敬虔なる善導大師の信念として、内外相應の至誠にあらざることを誡められたる教訓として、誠にさもあるべきことである。そして眞實の信心を得たる人は、外に偽善を現じて内に虚偽を懐くといふことはあるべき筈でない。故に善導大師の眞意をいたゞけば、此通常の讀み方で敬虔なる眞實信心の眞面目をあらはされたる語である。しかるに若し眞實の信仰に入らざるものにして、此御言葉を律法的に固執して、外に賢善精進の相を現するが如く、内も一點虚假を懐いてはならぬといふ意味とすれば、我等は忽ち躰かねばならぬ。何となれば我等は常に内心虚偽不實ばかりではないか、内に虚假を懐くことを得ざれといふても逆も出来ぬ。此に於て忽ち一轉して、全體外に賢善精進の相を現じて立派などの出来る様な殊勝の姿を現じて居るのが大間違である。此に於て文點を變更して、外に賢善精進の相を現することを得ざれ、内に虚假を懐けば也と喝破せられたのである。實に持戒持律の律法主義を一語で根柢から碎かれたる信仰である。此語は餘程聖人の繰返されたるものと見えて、『御本書』『愚禿鈔』は勿論『唯信鈔文意』にも出てある。和讃にも

外儀のすがたはひとごとくに、賢善精進現せしむ、



貧賤邪偽おほきゆへ、  
とある。『歎異鈔』にも

當時は後世者ぶりして、よからんものばかり念佛まうすべ  
きやうにおもひ、あるひは道場へはりぶみをして、なんく  
のことしたらんものは道場へ入るべからずなんどいふこ  
と、ひとへに賢善精進の相をほかにしめして、うちには虚  
假をいだけのものか。

とある。又『御傳鈔』平太郎御教化の中にも

垂迹において内懷虚假の身たりながら、あながちに賢善精  
進の威儀を表すべからず、唯本地の誓約にまかすべし、穴  
賢云々。神威を輕しむるにあらず、努々冥眈を回らしたま  
ふべからず。

とある。全體文點を附け換へて意味をあらはすことは、聖人  
ばかりではない、當時の解釋法にありたることで、必しも聖  
人獨特の方法といふてはなけれども、此文點の轉換によりて  
闡明せられたる、一點虚飾を許さざる聖人の生きしたる  
信仰の流露せるにいたりては、古今に超絶して聖人御一人と  
仰がねばならぬ。

是と同意味なる聖人の御歌がある。即ち蓮如上人『御一代

聞書』に御傳へなされてある、

世の中に尼の心を捨てよかし

女牛の角はさもあらばあれ

「さればかたちはいらぬことなり」と、蓮如上人が付け加へ  
られた。『改邪鈔』にも

都鄙に流布して遁世者と號するは多分一逼房他阿彌陀佛等  
の門人をいふか。かのともがらは、むねと後生者氣色をさ  
きとし、佛法者とみへて、威儀をひとすかたあらはさんとし  
だめ振舞歟。わが聖人の御意は、かれにうしろあはせなり。  
つねの御持言には、われはこれ賀古の教信沙彌の定なりと  
云云。しかれば絆を専修專念停廢のとき左遷の勅宣によ  
せまし／＼て、御位署には愚禿の字をのせらる。これすな  
はち僧にあらざ、俗にあらざる儀を表して、教信沙彌のこ  
とくなるべしと云云。これによりてたとひ牛盜とはいはる  
とも、もしくは善人、もしくは後生者、もしくは佛法者とみゆる  
やうに振舞ふべからずとおほせあり。この條かの裳無衣、  
黒袈裟をまなぶともがらの意巧に雲泥懸隔なるものをや。  
とあるは、聖人滅後原始時代の遺弟の目に寫りたる聖人の面  
影を偲びたてまつることが出来る。たとひ他人より牛盜人と

言はれても、佛法者と言はるゝことを嫌ひたまひ、教信沙彌  
の如く日雇人になりても、特に念佛者らしき風を現すること  
をいやに思ひたまひ、我こそは所謂愚痴無智の輩也、破戒無  
戒の徒也、實に五劫思惟の御苦勞も此愚禿の爲也、親鸞一人  
がためなりと、何のつくろひもなく、何の飾もなく、如來の  
知ろしめす儘に、打出したまひたのが聖人の眞面目である。

しかるに今日動もすれば此聖人の眞面目を誤りて見るもの  
がある。教信沙彌の定なりと仰せられたるを、貧生活に安ん  
ぜらるゝことと思ふたり、愚禿と仰せられたるを、聖人が特更  
に謙遜して、かく卑下されたること考へ、牛盜人とは言は  
るとも、佛法者後世者と見せぬ様にと、自ら晦まして、隠さ  
れたこと考へて、却て殊勝氣に振舞ふなどの教訓が、之を  
眞似して却て殊勝氣に振舞ふ弊に陥り、甚しきに至りて偽善  
に陥る處がある。是れ聖人の眞精神を頂かずして、矢張り威  
儀を表せぬといふ一種殊勝な威儀を表することになる。は何  
故かといへば、如來の御慈悲の前に飾りなく打出された眞  
味をいたゞかずして、頭の下りたる態度ばかりを擬するから  
である。

かく偽善に陥り、殊勝氣に流るゝことを嫌ふの餘り、他の

極端に奔り、徒に赤裸々に醜を暴露して、恥として顧みざる  
が如き弊に陥ることがある。こは亦聖人が愚禿悲歎述懐とし  
て骨身に徹する御懺悔を蔑にするものである。聖人が徹頭徹  
尾頭を下げて、一點自己の價値を認めたまはぬ自ら空うした  
まふ御心を仰がねばならぬ。聖人が『愚禿鈔』に

聞賢者信 顯愚禿心

賢者信 内賢外愚

愚禿心 内愚外賢

と仰せられた。實に愚禿が心は内愚外賢の名利の奴、虚名虚  
榮の塊也と懺悔したまふのである。加之『愚禿鈔』の内外對に  
は内愚外賢と共に左の如く繰返してある。

内外道外佛教。 内聖道外淨土。

内疑情外信心。 内惡性外善性。

内邪外正。 内虚外實。

内非外是。 内偽外眞。

内愚外賢。 内假外眞。

内退外進。 内疎外親。

内遠外近。 内迂外面。

内違外隨。 内逆外順。



内軽外重。

内淺外深。

内苦外樂。

内毒外藥。

内怯弱外強剛。

内憊意外勇猛。

内間斷外無間。

内自力外他力。

是れ聖人御自身並に當時に對する悲歎述懐にてまします。而して聖人が最後の御言とも見るべきは、『和讃』奥書八十八歳の御筆である。其御絶筆に、

よしあしの文字をもしらぬひとはみな、

まことのこころなりけるを、

善惡の字しりかほは、

おほそらことのかたちなり。

是非しらす邪正もわかぬ、

このみなり、

小慈小悲もなければども、

名利に人師をこのむなり。

是れ九十年御教化の最後の御遺訓かと思へば、我等は云ふべき言はない。實に我等は善惡の字知り顔の大虚言者であります。小慈小悲もたず、信仰を賣る名利の人師であります。南無阿彌陀佛々々々々々々。

## 善知識の恩

歎異鈔に曰く、親鸞におきては、たと念佛して、彌陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて信ずるほかに別の仔細なきなりと。

執持鈔に曰く、又(本願寺聖人仰)のたまはく、是非しらす邪正もわかぬこの身に、小慈小悲もなければども、名利に人師をこのむなり、往生淨土のためにはたゞ信心をさきとす、そのほかをはかへりみざるなり、往生ほどの一大事凡夫のはからふべきことにあらず、ひとすぢに如來にまかせたてまつるべし、すべて凡夫にかぎらず、補處の彌勒菩薩を初として、佛智の不思議をはからふべきにあらず、まして凡夫の淺智をや、かへすく如來の御ちかひにまかせたてまつるべきなり、これを他力に歸したる信心發得の行者といふなりと。

嗚呼聖人は御自身に於て何等の價値をも認めたまはなんだ。「是非しらす、邪正もわかぬこの身なり、小慈小悲もなければども、名利に人師をこのむなり」、是れ聖人九十年最後の御白である。「念佛より外に往生のみちをも存知し、また法門等をも、しりたるらんと、こゝろにくくおぼしめして、おはしま

してはんべらんば、おほきなるあやまりなり」と。嗚呼聖人には何等の持物ももちたまはぬ。「他力眞實のむねをあかせるもろく」の聖教は、本願を信じ念佛をまうさば佛になる、そのほか何の學問かは往生の要なるべきや、學問も名聞利養なり、人師も我慢勝他なり、我身として取るべきものなく、殘る所は罪惡の塊である。かくの如くあきるゝより外に致方なき我身である。愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑する、無慚無愧のこの身である。かくの如き凡愚底下の私に對して、下したまふ所は唯彼の高き岸より興へたまふ南無阿彌陀佛の綱一つである。汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん、すべて水火の難に墮せんことを畏れされの招喚の聲ばかりである。足の下は青ずみたる海である、燃え上る火炎は身を包まんとしつゝある、綱の強さと弱さとを顧る餘裕はない。喚聲の何人たるかを穿鑿する暇を持たぬ。五十二段の階級漸次自力を以て歷劫修行の結果、單に一段を餘すばかりの補處の彌勒菩薩すらも、猶五十六億七千萬歳の曉に達せずんば佛智不思議の岸上に手を達することあたはぬ。まして凡夫の淺智をや、況んや地獄必定の我等をや。唯たのむ所は如來誓願の喚聲ばかりである。信ずる所は念佛の綱一つである。此綱

を興へて下されたがよきひとである、此喚聲を取次ぎて下されたが、善知識である。我等は絶対に罪惡の塊である。救済は、絶対に知識の教である。正信偈に如來世に出興したまふ所以は唯彌陀の本願海を説かんとなり、五濁惡時の群生海、應に如來如實の言を信ずべしとのたまひ、又弘經の大宗師等無邊の極濁惡を拯濟したまふ、道俗時衆共に心を同ふして、唯斯高僧の説を信ずべしと仰せられたも是である。即よき人の仰せを蒙りて信ずるばかり別の仔細はない、ひとすぢに如來にまかせたてまつるべきである。

歎異鈔に曰く、念佛はまことに、淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄へおつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり、たとひ法然上人にすかされまゐらせて念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。

執持鈔に曰く、さればわれとして淨土にまいるべしとも又地獄へゆくべしともさだむべからず、故聖人のおほせに、源空があらんとおほせにゆかんとおもはるべしと、たしかにうけたまはりしうへは、たとひ地獄なりとも、故聖人のわたらせたまふところへまいるべしとおもふなり、このたび善知識に



あひたてまつらずば、われら凡夫かならず地獄におつべし、しかるにいま聖人の御化導にあづかりて、彌陀の本願をきき、攝取不捨のことはりをむねにおさめ、生死のはなれがたきをはなれ、淨土のむされがたきを一定と期すること、さらに、わたくしのちからにあらず、たとひ彌陀の佛智に歸して、念佛するが地獄の業たるをいつはりて、往生淨土の業因ぞと聖人さづけたまふにすかされまいらせて、われ地獄におつといふとも、さらにくやしむおもひあるべからずと。

淨土へ往くの、地獄へ落つると、善惡の二つを承知したつもりで居るのが大間違である。念佛は善であるから稱へるのではない、惡であるからといふて止められるものでもない。よきか、あしきかしらねども、善知識の仰せの儘を信するばかりじや、否信せずには居られぬ、唯善知識の御伴をするばかりじや、火の中でも、水の中でも、死罪でも、流罪でも、師の御出でになるところへ御伴をさしていたゞくのじや、自分の行くところへ來いと仰せ下さるのじや。如來は汝一心正念にして直に來れと仰せられ、善知識は我と共に來れと導き下さる。

如來の仰せの儘が善知識の御言、善知識の御言あればこそ如來直々の御言がいたゞかれるのじや。愚禿鈔には直は諸佛出

世の直説を顯さしめんと欲してなりと仰せられ、略文類には

悲願の直利を顯して如來の直説と爲したまへりと仰せられた。形を見れば法然、詞を見れば彌陀の直説、善知識といふは阿彌陀佛に歸命せよといへる使なり。唯仰せを蒙りて信するほかに別の仔細なきなりである。

歎異鈔に曰く、そのゆへは自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄にもおちてさふらはゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もまよびがたき身なれば地獄は一定すみかぞかし。

執持鈔に曰く、そのゆへは明師にあひたてまつらてやみなましかば、決定惡道へゆくべかりつる身なるがゆへにとなり、しかるに善知識にすかされたてまつりて、惡道へゆかばひとりゆくべからず、師とともにあつべし、されば、地獄なりといふとも、故聖人のわたらせたまふところへまいらんとおもひかためたれば、善惡の生所わたくしのさだむるところにあらず、といふなりと、これ自力をすて、他力に歸するすがたなり。

地獄必定の我等である、危篤の病人である、生死の苦海に沈みつゝある我等である。我等は唯善知識に遇ひたてまつり

たるを喜ぶばかりである。善知識の御伴をするばかりである。

涅槃經に曰く、善男子第一眞實の善知識は所謂佛菩薩なり、世尊何を以ての故に、常に三種の善調御を以ての故なり、何等をか三とする、一者畢竟軟語、二者畢竟呵責、三者軟語呵責なり、是義を以て菩薩諸佛は即是眞實の善知識なり、復次に善男子佛及び菩薩を大醫と爲すが故に善知識と名く、何を以ての故に、病を知り、藥を知り、病に應じて藥を授くるが故に、乃至善男子譬へば船師の善く人を度するが故に大船師と名くるが如し、諸佛菩薩も亦復是の如し、諸の衆生をして生死の大海を度せしむ、是義を以ての故に善知識と名くと。實に我等が地獄必定の病を知りて、本願醍醐の妙藥を與へたまふのである。我等が生死大海に苦めるをあはれみたまひて大願の船に乗じて運命を共にして、彼岸に渡してくださるのである。地獄必定の我等、苦海沈淪の我等、唯與へたまふ藥を頂くばかりである、呼び掛けたまふ御聲を信するばかりである。かくまでも我等の病をかねてしらしめすのである。佛かねてしらしめして煩惱具足の凡夫と仰せらるゝのが是である。其佛の御心を傳へたまふ聖人は、親鸞も此不審ありつるに唯圓房おなじころにてありけりと仰せられるのである。

いさゝか所勞のこともあれば死なんざるやらんと心細くおぼゆることも煩惱の所爲なりと仰せ下さるのである。かくまでも我等の病を知らしめして下さるのである。苦を知らしめして下さるのである。信ぜざるを得ぬ、仰がざるを得ぬ。

華嚴經に曰く、汝善知識を念ぜよ、我を生むこと父母の如く、我を養ふこと乳母の如く、菩提分を増長すること衆疾を醫療するが如く、天の甘露を瀧くが如く、日の正道を示すが如く、月の淨輪を轉ずる如しと。實に善知識は父母なり、日月なり。無明長夜の燈炬なり、生死大海の船筏なり。是聖覺法印の法然聖人を嘆ぜられた言である。而して上の涅槃經も華嚴經も、親鸞聖人が教行信證に善知識の恩を渴仰せられたる御文である。若し地獄必定の自覺なくんば善知識の恩を知ることとは出來ぬ。佛恩報謝の念なきや、同行善知識に親近せざるは雜修の失である。必定地獄に落つべかりける我等、此如來善知識に遇ひたてまつる。身を粉にしても報ずべきである。骨を摧きても謝すべきである。南無阿彌陀佛。



講義

「教行信證」信卷三信釋

(夏季求道會講話)

近角常觀

第六席

「信樂釋」(專修念佛の意義)

今席よりは信樂釋に移る事と致します。次言信樂者、則是如來滿足大悲圓融無碍信心海、是故疑蓋無有間雜。故名信樂。即以利他回向之至心爲信樂體也。然從無姑已來一切群生海、流轉無明海、沈迷諸有輪繫縛、衆苦輪難、清淨信樂法爾、無眞實信樂。是以無上功德難、巨値遇、最勝淨信難、巨獲得。一切凡小一切時中、貪愛之心常能汗善心、嗔憎之心常能燒法財、急作急修、如炙、頭燃、衆名、雜毒雜修之善、亦名虛假諛偽之行、不名眞實業也。以

此虛假雜毒之善、欲生無量光明土、此必不可也。何以故、正由如來行菩薩行時、三業所修乃至一念一刹那疑蓋無雜、斯心者即如來大悲心故、必成報土正定之因。如來悲憐、苦惱群生海、以無碍廣大淨信回施、諸有海、是名利他眞實信心。

『次に信樂と言ふは、則ち是れ如來の満足大悲圓融無碍の信

心海なり。是の故に疑蓋間雜有ること無し。故に信樂と名く。抑々今言ふ如く、まことといふは此方より何程疑ひ隔てゝも、其の者を飽く迄見捨てず飽く迄哀はれと思召し、飽く迄まこととて向つて下さる遺る瀬無き佛のお慈悲といふより外は無き。故に其のまことのも一つ譯と言ふ時は、此の遺る瀬無き慈悲と言はなくてはまことの譯は分らぬのである。即ち今信樂とは、其の遺る瀬無き大悲と示し下されたのでありませう。即ち「信樂と言ふは、則ち是れ如來の満足大悲圓融無碍の信心海なり」である。如來の満足大悲とは、如來の大悲は一分一厘缺け目無く、飽く迄此の者に善くなし下され、如何なる悪しき者をも見捨て無き廣大のお慈悲故に、満足大悲である。此の満足大悲といふ事は、唯佛のみに言へる事にて、等覺補處の彌勒菩薩と雖も、満足大悲とは言はれぬのでありませう。又圓融といふは、其の者を飽く迄圓ろく融かし下さる慈悲であり、無碍といふは、此の者に更に障り無く無碍にして下さるのである。其の廣大の満足大悲圓融無碍の信心のお心故に、疑ひといふものは微塵と雖も間雜して居る事は無い。故に此のお心を信樂と名くと示し下されたのである。又次ぎには

『即ち利他回向の至心を以て、信樂の體と爲るなり』

こは至心の處に示し下さる如く、至心のまことは、南無阿彌陀佛の至徳の尊號を以て體とする。其の長々の至心の佛のまことは、如何なる者をも見捨てぬといふあなたの慈悲である。故に此の度びは其のあなたの信樂のお慈悲は、至心のま

ことを以て、其の體とする。即ち其の至心のまことが體となりて、其の至心が何う現はるか。といふに、どのやうな者でも見捨てぬとの大悲の信樂が、即ち其の佛のまことの働である。故に南無阿彌陀佛は至心の佛のまことの體にて、其のまことが此の度びは信樂のお慈悲の體となるのである。これは例の親の手織りの喩えて言へば、親の一枚の手織りの着物、即ち親のまことである、其の親のまことは、其の汗だらけの亂暴者の小供に着せ度いとの親の慈悲心の外に無い事となる。則ち親のまことの體は此の手織りの着物にて、此の手織りを離れて親のまことは無く、其のまことは、其の仕て見やう無き汗たらしの亂暴者の爲めに、此の手織りを着せて遣り度いとの、遺る瀬無き親の心の外ならぬのである。即ち信樂のお慈悲の體、至心のまこととなるのでありませう。

そこで前々席に引き續き、再び繰り反す親の手織りの譬へであります。今日前々席の續きとして、之をお話するのは、佛のまこと、お慈悲の遺る瀬無き處を聞かざるゝと、何人も其の廣大のおまことを信せず居られ無くなるからであります。前々席に於て、佛が五劫の思惟求切の修行に於て、南無阿彌陀佛の一つを選び取り、御成就下された事を、親が手織りを織り上げ、仕立上げて下されたに喩へたのである。即ち佛が諸佛二百一十億の淨土の有様を御覽下され、其の諸佛淨土の往生の行の中より、南無阿彌陀佛の一行を選び取り、之を御成就下された事を、親が亂暴者の汗かきの小供の爲めに、數ある種類の着物を皆な斥け、其の者の爲めに態々一枚の手



織りの着物を造り上げ、之を其の小供に與へて下さるに喩へるのであります。夫れを今一度叮嚀に申すならば、親が小供の爲めに數ある絹類や華美なる着物を皆な擇び捨て、態々其の者の爲めに苦勞して手織りの着物を作り上げて下されたは、何故であるか。外の着物では皆なよごし、破つて仕舞ふ仕て見やう無き奴である爲めに、其の者が可哀相である、其の者に着させて助ける爲めには、もう親の手織りの外仕方が無い」と、態々一枚の手織りを造り上げて下されたのである。即ち戒行の着物も破つて仕舞ひ、坐禪の着物も引き裂いて仕舞ひ修行の着物も汚がして仕舞ふ仕て見やうなき我々である。故に此等修行の着物では連も駄目故、其の着物の着れぬ者に着せ度いと、態々仕立上げ下された一枚の手織りの南無阿彌陀佛である。故に親の手織りは、唯派出て無き、丈夫な着物といふ丈けて無く、我々亂暴者の汗かきが着ていたまぬ堅牢の着物なのである。此の着物を作りて助けるとあるが、南無阿彌陀佛の一行で助けるとの彌陀の本願なのであります。て我々此の南無阿彌陀佛を頂いて、南無阿彌陀佛と稱へるは、唯一應に南無阿彌陀佛を稱へるのでは無い。外の道ではゆけぬから、此の一枚の親の手織りを着るのである。前々席にも申す如く、法然聖人が善導大師の「彼の佛の願に順ずるが故に」の御文をお讀みなされ、「阿彌陀佛の本願は、唯專修專念である、一心一向である、一心に専ら彌陀の名號を稱するのである、唯南無阿彌陀佛丈けてある」と仰せられたは、何故であるか。外の道が出来ぬ程なら然うは仰しやらぬのであるけれども、外の道が出来ぬ爲めに其の者を助けると御成就下された南無阿彌陀

佛の六字なれば、此の六字は、我々坐禪戒行の出来ぬ者、菩提心の起せぬ者、孝養父母奉事師長の出来ぬ者を助くるとの南無阿彌陀佛の六字である。故に我々五逆十惡具諸不善の輩に於ては外の物はいらぬ、唯南無阿彌陀佛の一つであるとお示し下されたが、法然聖人の專修念佛の御教化なのである。遂に其の爲め其頃の聖道門の人の立場よりは外道と見られ、法然聖人親鸞聖人を始め、流罪の厄も遇ひなざるに至つたのであります。夫れは何故であるか。若し法然聖人が「坐禪を仕度い者は坐禪を仕て、念佛を申せ、修行を仕度い者は修行をしつゝ念佛を稱へよ、眞言天臺を修し度い者は、眞言天臺を行じつゝ念佛をなせ」と仰せられたのなら、流罪の厄に遇ひなざる事は無つたのである。何故なれば、たゞ念佛といふ事丈けなら、其の頃餘宗にも随分有つたのである。叡山の慈覺大師など、入唐して念佛を修しなされた程なれば、唯念佛したとて流罪になるといふ事は無い。處が法然聖人の念佛は、專修念佛といふ事であつたのである。法然聖人の御教化は、天臺や眞言の立派な教法は有つても、極悪下劣の我々には夫れでは連も駄目である。御存知の如く源信和尚の『往生要集』には初めから、

夫れ往生極樂の教行は濁世末代の目足なり。道俗貴賤誰か歸せざらん者か。但し顯密の教法其の文一に非ず、事理の業因其の行惟れ多し。利智精進の人は未だ難しと爲さず、予が如き頑魯の者豈敢てせんや。是の故に念佛の一門に依りて、聊か經論の要文を集め、之を披き之を修するに、覺り易く行し易し。云々。

天臺眞言の顯密の教法は有つても、予が如き頑魯の者には出来ぬからせぬ」と源信和尚が仰せられた故、「出来ぬからせぬ位」の段ぢや無い、其の出来ぬ事を佛かねて知し召して、其の出来ぬ者を助くるとの彌陀の本願念佛で無いか」と、教へて下されたが、念佛の元祖法然聖人の專修念佛の御教化である。其の代はり他の自力聖道の立場の人からは異端と排せられ、遂に今いふ流罪にお遇ひなされたのであります。

三

處が如何に他の立場の人より排斥を受け、惡しざまに言はれやうが、此の專修念佛の教法ばかりは、實にあなたの生命であり、特色である。御存知の如く、彌々其の爲め流罪と事さまり、御出かけなさらうとする時も、猶ほ矢張り專修念佛をお勧め下されたのであります。其の時御弟子信空上人に對せられて其時の仰せには、『古德傳』の中に、「此の念佛の爲めに流罪に遇ふと雖も、決して汝等悲むにあたらぬ。驛路は是れ昔より聖者の行く處である。支那に於ては一行阿闍梨、日本に於ては彼の優婆塞、又支那に於ては白樂天、日本に在つては菅相丞、此等の聖者は皆な何れも配所に越かれたのである。況んや末世愚春の源空に於てをやである。寧ろかゝる事無くば、いつ迄も帝畿に止まりて變はる事有るまじきに、此の時に當りて邊鄙の群衆を化益出来ること、是れ實に莫大の利生である。但し痛む處は源空興ずる淨土の法門は、濁世衆生の決定出離の要道故、之に仇をなす者は、定めて守護の天等の眞臘を蒙らんか。すれば此の度びの源空が流罪、弟子の斬刑、斯くの如き前代未聞、事常篇に絶えて居る。因果の

空しからざること、生きて世に長らうる者は、必ず後に思ひ合はすべきである」と仰せられ、更に一人の門弟に對し、卒爾をも省みず一向專念の義を述べ給ふたとある。即ち後に信空上人此のお言葉を思ひ出し、果して間も無く承久の亂が起りて、上下を問はず此の事に關係あつた方々が皆な配所にお出かけになる事になつた。之を見て信空上人「先言たがはず、後生宜しくきくべし云々」と言はれたとあります。斯く法然聖人にありては、既に自分が流罪と事ささらうが、此方は何處迄も無碍の一道である。流罪が法然聖人には、更に障りにならぬ、寧ろ其の自分を流罪に處して、此の念佛の法門に妨げをした者が冥衆の眞臘を受けると、却つて其の人を氣の毒に思し召されたのである。又此の流罪にお遇ひなされた事が却つて計らずも末世邊鄙の衆生を御化益下さる事が出来た譯にて、此の御流罪があればこそ、我々末世罪惡の者が救はるゝ教法が、普く行はれ下されたのであります。處が此の時御弟子西阿と申す人が聖人の袖を控えて、「今日は其の專修念佛の爲めに流罪にお出かけなさらうとするのである。爾るに此の際に夫れをお説きなざるは如何のものか」と申上げた。すると平素優しき聖人が、此の時ばかりは辭色激しく、「汝經文を見ずや」と仰せられた。そこで西阿が「成る程經文には左やうお説き下されてあるも、此の際世間の機嫌を存するばかりであります」と申し上げたら、此の時聖人氣色激しく、「設ひ源空を死刑に行はると雖も、更に變ず可らず、設ひ其の爲め殺されても、此の念佛は此の仕て見やう無き源空を助ける」との專修念佛なれば、此の念佛を言はずに居られぬ」と仰せ



られたとあります。實に是れ程迄に尊き専修念佛である。故に眞言なり天台なり、顯密の行法を行じつゝ念佛せよと言へば世間的にはまことに都合よいのでありますけれども、夫れでは念佛の絶對なるところが頂けぬ。故に茲は何うあつても、はつきり「さじめ」を立て、言は無くしては居れぬのであります。

四

話が横道に入りますけれども、今日世間は大本宗教に心を懸けるやうになり、今日では一般に宗教が大切であると迄にはなつて来たのでありますけれども、猶ほ宗教ならば何の宗教でも結構であるとの説行はれ、甚しきは宗教の根底はどの宗教でも一つである、とさへ言ふ學者があるのではありません。併し夫れでは其の宗師々々の各「さむ」を立て、主張する主張は無くなつて仕舞ひ、殊に我々の信樂する念佛成佛は眞宗の難有いとは無くなつて仕舞ふのである。私其他力のお慈悲を聞く者に於ては、唯此の念佛の仰せばかりが有り難いのであります。夫れは何も自分の教へといふところに力を入れ、力んで頑固に念佛ばかりといふのでは無い。實際自分が此のお慈悲を頂いて、自分如き此の淺間しき仕て見やう無き者を救ひ給ふ念佛と頂く時は、餘の教法は何程有らうが、此の念佛の御慈悲ましまさずしては、自分如きが救はるゝ道無き唯一絶對の一道なのである。諸天善神も此の一道を護り給ふといふ此の一道なのである。此の一道に妨げを爲す者は、守護の諸天の冥暈を蒙ると、法然聖人が仰せられた程の此の一道なのである。又親鸞聖人には、此の南無阿彌陀佛のお慈悲を頂く

れ親のまことは脱けて仕舞ひ、「親が着よと言ふから着る」となるのである。それでは念佛の意味は全く無くなつて仕舞ふのであります。

五

そこで茲が法然聖人より親鸞聖人にゆく「移り目」であります。法然聖人の御弟子三百八十餘人の方方は、皆な此の法然聖人の専修念佛の御教化をお聞きなされたのである。前々席に申す如く、此の専修念佛の御示しは、法然聖人『選擇集』の御教化の骨子故『選擇集』を讀みぬ方は無く、『選擇集』の御教化を聞かれぬ人は一人も無つたのである。然るに聞きながら、眞に法然聖人の仰せを聞き取られた方は、『御傳鈔』の信行兩座の處に、信の座につかれた五六輩の人に過ぎなかつたのである。夫れは何故であるか。之は親のこさえて下された手織り故、此の手織りを着るんだと、力んで着る事に皆ななつて居たのである。力んで着るの故、心から着ては居らぬのである。念佛は阿彌陀佛の本願の行である。だから念佛を稱へるのだとすると、「親は外の着物を着るのぢや無い、親がこさえた手織りを着るのぢや」と言つて下さる故と、無理に親に柔順にして親の手織りを着て居るのであるけれども、心に何て外のを着てならぬのやら、親の手織りが夫れ程有難いのやら、更に譯が分らぬのである。即ち其の證據には、形に手織りを頂き、口に念佛しながらも、心に「もつと綺麗な心に成り度い」「こんな悪い心では仕やうが無い」など、形に親の手織りを着ながら、心に他人の着物を羨む心がある。形に手織り着ながらも、心に他の着物を着度いといふ思ひが

と、十方無量の諸佛が、百重千重圍繞して、其の者を喜び護り給ふ」といふ言葉もありません。其の唯一絶對の一道は、何も之を我々吾が佛尊して言ふのでは無い。此の淺間しき仕て見やう無き、何れの行も及び難き五逆十惡の私を、飽く迄見捨て給はぬ一道は、此の一道を外にして、他に二あること無きからである。て法然聖人が茲を深く立ち入りてお示し下されたが、聖人の専修念佛の御化導なのであります。

そこで喩えて言へば、茲に梨もあり林檎もあり、果物には色々の種類がある。斯く色々の果物多けれども、栗に如く果物は無い。坐禪の林檎、戒行の梨はあれども、南無阿彌陀佛の栗の味には如かぬ。故に「外のものでは無い、もう此の唯一の栗である、故に此の栗を喰へ」とお示し下されたのが法然聖人の専修念佛の御教化なのである。それで皆んなが其の御教化通り、其の唯一の有難い栗である」と味はひて頂けば善いのであるけれども、處が茲で多くの人は、あの赤い林檎の色彩の無き、此のみにくき針の迷のある栗となり謎や形のみにくき事に目を着るから可かぬのである。多くの人が茲で、法然聖人の教へ下さる念佛は、「坐禪で無く、戒行で無く、唯念佛である。念佛とは南無阿彌陀佛々々と口に念佛を稱へることである。だから法然聖人の念佛は、南無阿彌陀佛々々と稱へることである」と取るから、栗の有難い處が味はへ無くなるのである。「此の南無阿彌陀佛は、親が態々自分の爲めにこさえて下された手織り故、外の着物は着てならぬのである、此の一枚の親の手織りを着ぬならぬのである」と着るから、其の態々自分の爲めにこさえて下さ

ある。て之を親鸞聖人は専修雑心とお示し下された。即ち形に親の手織りを着て居ても、心が外の着物着て居るのである。否な設ひ心で着て居ても、「親の下された着物を着んならぬ」と、遂に自分の心でこさえて、無理に努めて着て居るのである。故に其の一方には心の底に「親の手織りも結構なれども、既に有る着物は着てもよからう、今迄天台眞言にて有る着物を着ても悪いことは有るまい」となる。聖人の仰せは念佛ばかりといふことなれども、外の事難へて仕たとして、何も悪い事するのでは無い、故に南無阿彌陀佛を稱へつゝ、外の善き事したとて差支へは有るまい」といふ事になり、遂に専修念佛々々々と口には言ひつゝも、戒行を持ち觀念を修しつゝ念佛する者が出来、最後には念佛仕ながらも諸行を合せ論じ「念佛は主なるも出来る時は慈善を爲るのぢや、功德を修するのぢや」と形に親の手織りなり着がら心に他人の着物を羨むやう方で、南無阿彌陀佛々々と念佛稱へながら心が綺麗ななり度いと、定散心にて念佛する者が出来るやうになり、又は「俺は親の手織りを着て居るぞ」と、親が下された質朴なる手織りを着るのを、着る者の誇りとするに至り、遂に「我は念佛行者である念佛信者である」と、口に南無阿彌陀佛を稱へるのが、いつの間にか自分の信仰を衒ふやうになり、肝腎の手織りを選んで仕立て、下された親のお慈悲は何處へやら行つて仕舞ひ、折角の専修念佛の御教化の御眞意はいつの間にか碎かれ、所謂「専修専念の人は甚だ稀なり」となつたのであります。

六



て前々席にも申す如く、親の手織りの譯は分るも、夫れは唯理窟丈けて、心に眞に分る人は甚だ稀れてあつた。喩へば茲に藥が有つて、極上等の藥である。他の藥では助からぬ病人にきく肺病の妙藥である。其の藥を頂いて、「成る程之はよき藥である。俺はまだ肺病にならぬも、今飲んだら定めてよく利くて有らう」と飲むのでは、飲んで折角の妙藥の効能が更に顯はれぬ。夫れでは「五逆十惡の者が助かる念佛故、沉んや善い者が飲んだら猶ほ救はるゝて有らう」と飲むのである。又夫れ丈け利く肺病の妙藥と聞いても、自分がまだ眞に其の病氣に罹つてると思はぬ中は、結構な藥と眺めて居るばかりで、眞に其の藥を買ふ事せず、飲む事をせぬ。夫れは何故であるか、茲が實に親鸞聖人と他師との違ひ目なのである。

親鸞聖人の示し下さる處は何うかといふに、斯く折角の法然聖人の專修念佛の御教化も、聞く人の間違ひで「念佛は親が態々作りて下された一枚の手織り故、之を着んならん」といふ點に力を入れて仕舞ひ、肝腎の「其の仕て見やう無き者の爲めに御成就下された唯一の念佛」といふ遣る瀬無き念佛の哀れみといふ方が無になりて仕舞うた。そこで親鸞聖人が示し下さるは「外の事は無い、汝斯く親の手織りを頂きながら、他人の着物を羨み、他の着物も着て見度いなど思ふは、何故であるか。又此の妙藥を頂きながら、此の藥を人ごとの如く考へ、自分も今の中に飲んだらなど、ゆつくりした考起して居るは何故であるか。唯一言である。汝は先づ汝の身の上を思つて見よ。汝全體自分で華美なる着物着られ

我は長々心配して、我が慈悲親切で固め出したる此の一枚の手織りなるに、汝はまだ他の着物も着れる自分である、まだ夫れ程の重病人で無いなど、身の程を知らぬにも程がある」と。此の親心の遣る瀬無き處に氣がつくと、他の着物を着、他の藥を飲まうと思ふ氣が最早や無くなり、今日迄他の着物を着度いなど、思ふたは、「全く身の程知らぬ間違ひであつた」此の仕て見やう無き重病人に對し、其の遣る瀬無き親様のあ心であつたか」と頂かれるのであります。

七

猶ほ茲の處で、「汝は他の着物の着られぬ者である、不治の肺病人である」と、唯突き放さるゝ丈けならば、唯苦しむ丈けでありませぬけれども、「其の仕て見やう無き者なればこそ、茲に親が汝に着させる爲め手織りを用意して置いてやつたのである。」他の藥で直らぬ病氣なればこそ、此の服の藥を興へるといふのである」と、即ち聖人の示しには

極惡最下の衆生のために、極善最上の法をとく。

其の「他の着物の着られぬ者に着させ度い」他の藥で助からぬ者に飲ませ度い」とある藥が、此の本願酬の妙藥なのである。て此の親の御親切なる妙藥のお心を頂けば、茲て初めて其のお藥が頂かれ、眞の罪惡觀も茲に生じ、專修念佛の眞の味ひも茲て出て來るのである。其の故は此の大慈悲深重の藥のお心を聞かされて見れば、他の藥では到底助からぬ私であつたのである。之を『歎異鈔』の御示して頂けば、

親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまいらずべしとよきひとのおほせをかうふりて、信ずるほかに別の仔

る人間と思つてるもの故、矢張り善い着物着度いといふ考が退かぬ。親の手織りの南無阿彌陀佛を稱へつゝ、猶ほ外の着物が着れぬ身なのである。其の證據には今迄外の着たあ」と、皆な壞はして來たては無いか、そんな事出來る汝ならば、親は態々苦勞して此の一枚の手織りをこさへはして下さらぬ。外の着物が着れぬ汝なればこそ、親は長々心配して、其の汝の爲めに此の一枚の手織りを作り上げて下されたのである。又藥にしても、汝「肺の妙藥結構である、今の中に飲まう」などは、何言つてるのであるか。汝は今自分が現に肺病に罹つて居る事を知らぬもの故、そんな事を言つてるのであるけれども、汝は疾くから肺病にかゝつて居るのであるぞ」と、茲を力強く御示し下されたのが、親鸞聖人の御教化であります。て之を知らされると、今迄言つて居つた事は皆な間違ひである。今日迄は他の着物でもまだ着られる氣があるから、「有る着物は着てもよからう」などと思つたのであるけれども、他が着れぬ奴故、親が態々手織りをこさへて下されたのである。外の藥も飲むが、念佛は最上の藥と聞く故、之も飲まうといふ位なら、親は此の服の藥を作りはせぬ。「汝は不治の病症にて、他の藥では逆も直らぬ重病人であるぞ、其の爲め汝が遂に仆れて死ぬのが不慙堪えられぬ故、其の汝に飲ませよう」と長々苦心して作り出したる此の服の藥である。其の仕て見やう無き亂暴人に懸はせ度いと思へばこそ、

細なきなり。念佛は、まことに淨土にむさるゝたねにてやほんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ、そのゆへは、自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄にもおちてさふらはばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはばいづれの行もあよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

て、爾ら其の妙藥が果して此の重病人に利くか、そんな事は最早や聞かなくてもよいのである。此の到底仕て見やう無き重病人に飲ませる爲めに、親が態々苦心して下された其のお藥と頂けば、此の藥が利く利かぬは最早や問題で無い。此方ほどの着物も着られぬ者であつたのである、然るに其の着られぬ者に、此の手織りを着せて助け度いとの親の御親切、お慈悲のみが難有いのであります。て親のまこと、といふは此の有難きまこと、藥といふは之れ程の貴きお藥であつたのである。茲の處の親の御親切、思召しの程をさかされて見ると、何人も「私が悪うムりました、仕て見やう無き私の淺間しさを、夫れ程迄に思召し下さるお慈悲なるか」と頂かして貰はずには居られぬ。其の頂けるは、斯く私の惡しさの程を遣る瀬無く佛の方より先き知り抜き、其の者を捨てぬとの廣大のお慈悲の故に頂かれるのであります。

猶ほ今いふ手織りの喩へは、色々の場合に當てはまる。以



上は主として、親の手織りの念佛しながら、親の御眞意が頂けぬもの故、外の着物に思ひが残る間違ひにつき申ししたのであります。或は「念佛しつゝ現在を祈る心が起りたり」或は念佛を稱へて修行を仕度い、或は念佛を稱へるのが修養のやうに思ふて稱へる者等色々ある。是れ皆な同じ事にて、親の手織りは外の着物の着られぬ者に、此の一枚の手織りを着せて助け度い、との切なる慈悲なる事に氣がつかぬからであらう。て信仰上氣をつけ無くてならぬ處に二つある。今のは親の手織りの遺る瀬無き心も頂いて、眞に吾が身の悪しさの知れる方につき、申したのである。て皆さんが信仰を得度い、と言はるゝのも、要するに此の親の手織りを着度い、と言はるゝのであるが、之を着るは「此の手織りは、如何な亂暴者にも破られず、如何程汗かいても汚されぬ金剛堅固の手織りである、故に之を着んならぬ」と力みて着られる手織りには無い。茲は佛の慈悲を皆さんの思うて居られるよりも、もつと、崇高く、我々は何一つとして善く出来ぬ極悪深重の者である。當り前て着物が着られる人間では無いのに、其の者を殊に哀れみて、其の仕て見やう無き者を、我が助けると作り下された手織りである。其の他の着物着られぬ者の爲めに、夫を哀みて、大悲の思ひやるせなく、態々御成就下されたる超世無上の本願である。世間の上でも、勳功立てた者に朝廷より褒賞を賜はる場合は法規上の事である。處が陛下より民百姓の災難に罹れる者を哀れみて、之に救恤を下さるといふ段になると、難儀して居る者程彌々不感である。喰はれぬ者程益々可哀想である」と、喰はれぬ者、仕て

見やう無き者の爲めに、特に勅掟を垂れ、勅使を下さるのにて普通の場合の法規上の論功行賞を超越して居る。其の如く今阿彌陀佛の本師法皇より本願を下さるのには、取りも直さず諸佛の本願をは飛び越えて、如何とも仕て見やう無き者に此の我が本願の親心を届けて其の者を救ふてやり度いとのお慈悲である。であるから我々罪業深重の仕て見やう無き者に於ては、「天にも地にも仕て見やうなきに、實に此の廣大のお慈悲ましませばこそである。此の淺間しき根性の底を知り抜き、斯く迄の廣大のお慈悲を起し下された事の有難や」と夫れ故人生の家庭、社會、政治、實業總ての事は其の根本を茲に立てぬと、本當の事は出来ぬのである。何故なれば我々此の佛のお慈悲を頂いた廣大な味ひよりいふ時は、我々が此の世で位置財産を争ひ、名譽を取合ひ、五分々々てやつて居るのが大なる間違ひにて、其の者が「私が悪うりました」と遺る瀬無き此のお慈悲に氣が着いた一念には、此の度びは此のお慈悲の上よりやらせて頂く事が出来るのである。即ち此の世の「漁すなどり」する上にも、此のお慈悲を頂いて、やらせて貰ふ事が出来るのであります。

九

さて其處で此の度びは反對に、私が親の手織りを着たとする。處が今言ふ如く、此の南無阿彌陀佛の親の手織りは、大悲の佛が私を遣る瀬無き思召し下さるお慈悲の塊りとなる。此の六字は陛下より窮民に賜はる御見舞ひの如く、眞に我々を哀はれと、遣る瀬無き血潮て絞り上げ、織り上げて下さられた一枚の手織りとなる。て此の度びは一寸遠慮心を起し、

「あゝ有難い親の手織りである。之を粗末にしてはならぬ。之を大事に仕なければならぬ」と、今度は遠慮をするやうになる。て動もすると茲で「今迄政治實業に一身を忘れて居つたは、如何にも淺間しき事であつた。今後は止めやう」といふ事になる。之れでは前席に言ふ「内外明闇を簡はず、皆な眞實を須ふる」にはなつて居らぬのである。成る程我々「漁すなどり」をするは善く無いが、佛の仰せは「夫れを仕てならぬ」で無く、又「仕てよい」と仰せらるゝのでも無い。其淺間しき仕てならぬ事をする者が眞に可哀相ぢや」と其の者の爲めに、夫れを救ふと御成就下された本願故に、他の着物ではよごして仕舞ふ汗かきの亂暴者に着せると、こしらへて下された手織り故に、汗をつけてならぬと、汗の出る亂暴者が骨折るのでは無い。我々は其の者々々の因縁に従つて、或は獵をするあり、百姓するあり、奉公するあり、乃至政治實業學問するあり、身分に應じて色々ある。が其の業因に従つて色々の事する汗かきの亂暴者が、南無阿彌陀佛々々々其の儘纏へるやうに、選りに擇んで御成就下されたる南無阿彌陀佛の手織りである。故に手織り成就の御心が眞に頂けたなら「私如きが着て汗をつけてはならぬ」と、あとさがりするては無い。『御文』の中にも

かゝるあさましき罪業にのみ、朝夕まどひぬる我等ごとき  
のいたづらものを、たすけんとかひまします彌陀如來の  
本願にてましますぞ、とふかく信じて  
とある仰せ故、斯くの如き者を眞にも見捨て無いお慈悲と頂  
けば、「内外明闇を簡はず」である。即ち在家も出家も政治家

も教育家も實業家も、凡そ人間といふ人間は、皆な穢れ果てたる汗だらけの悪業煩惱の者なるに、其の者に着せんと、態々汗にもよごれず、火にも焼けざる手織りを作り出して下されたる、廣大の南無阿彌陀佛の念佛である。て其の難有き廣大の思召し程の頂き、内外明闇を簡はず南無阿彌陀佛々々々と喜ばせて貰ふのが、其の手織りを頂いた味ひであります。故に茲は實に肝要のところに、他力を頂いた味ひは、實に自分の罪深き事、地獄の底迄も我が身が墮ちられるのである。故に此の罪業深重、五逆十惡、地獄一定を洩るゝ者は一人も無い。夫れ故、今席の「信樂釋」の先き程申した次ぎの處には『然に無始より已來、一切の群生海、無明海に流轉し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清淨の信樂無く、法爾として眞實の信樂無し。』

と仰せらるゝのである。其の代はり、其の淺間しきを捨て給はぬ御慈悲の力強きをお示し下さる段になると、『信卷』の初めに  
偶淨信を獲ば、是の心顛倒せず、是の心虛偽ならず、こゝを以て極悪深重の衆生、大慶喜心を得て、諸の聖尊の重愛を獲るなり。

其の五逆十惡の者の爲めに、態々善知識なる使ひを立て、手織りの遺る瀬無き御苦勞をお知らせ下さるは、「ひとへに親戀一人が爲めなりけり」——此の廣大のお慈悲は私一人のものとして頂かれるのである。斯くして我々のする日常生活は、如何にするも罪惡の生活なれども、其の生活の上にも其の者を見捨てぬとの、南無阿彌陀佛のお慈悲頂きた有様は、眞に佛の



眞實を須むさせ貰ふものである。て「次いで彌勒の如し」とも  
 示し下され、又「即ち是れ佛性を得たる者」とも仰せられ、  
 又「是心是佛ぢや」ともお知らせ下さるのである。實に我々の  
 罪の深き斯くの如くてある處へ、此の廣大のお慈悲を頂く爲  
 め、我々の罪の心滅び、淺間しき根性の根が切れ、  
 超世の悲願さしより、我等は生死の凡夫かは、  
 有漏の穢身はかはらねど、心は淨土にすみあそぶ。  
 である。實に我々は何處迄も低く、お慈悲は飽く迄も高  
 く、心中は落ち心地で奈落の底迄落ち込み、其の者が大  
 悲の願船に乗じて光明の廣海に浮かばせて貰ふのである。今  
 日は之より信仰談話會に移ると致します。己上。

(夏季求道會第四日第二席)



懈怠勝ちと思はせて頂  
 くと亦格別有難い

九尾猪 太郎

私は既往五ヶ年間、先生に非常なる御心配を掛け、御世話  
 になりし者で御座ります、殊に一昨年来道瀨なき親心を頂き、  
 今年今日の法味は、昨年今日の法味と同じからず、誠に昨今  
 は此馳走を思ふ存分に頂き、此胸一配に溢れて下され、行住  
 座臥歡喜の念佛ならざるはなく、右顧左顧廣大深重の念佛な  
 らざるはなし。私は現在斯る仕合の身上に育て上げられまし  
 た。罪惡も煩惱も憍慢も總て一功御慈悲の裡に押包まれて、際  
 立ちて淺間敷しいとか煩惱じやとか罪惡じやとか申されませ  
 ぬ、何事に就ても唯感謝の念あるのみであります。今度先生  
 に御願申上げ、私の御導きに預りし跡々を告白させて頂き喜  
 ばせて頂かんと存じます。

私は祖母伯父に極縁が深くございまして、幼稚の折より殆  
 んど此方々と寢食を共にし、非常に可愛がりて下され、八歳  
 父病歿以來全く其家に引取られて、十數年間同居致したので  
 あります。家は眞宗大谷派にて、當時一家擧て法義を愛樂  
 し、至つて圓滿に床しく暮して居られたので、私も既に四五

歳の頃より、正信偈和讃を聞覺へ、朝夕動行の席に詣て、伯  
 父は雅い私に信仰の御話をして下され、又時々附近の寺院に  
 連れられて參詣致しました。祖母は八十三の高齡にて死亡せ  
 しが晩年長の難患にも、一言病苦を啣しこともなく、苦し  
 き時程多く御恩よ御慈悲よと喜ばれ、伯父も又祖母の氣風を  
 受けて屢逆縁に遭遇せしも聊憂の氣色なく、唯ニコニコ有難  
 いことなり仕合なりと平氣でして、其佛は今尙目前に散らつ  
 く様に存じます。

私十三四歳頃性格急に無慚放逸となり、祖母伯父は此が爲  
 め一方ならず胸を痛められしも、私は一向無頓着にて、悪行  
 は日に募り、時には無斷に家を飛出して親戚に預けられしこ  
 ともあり、一時は頗る持て餘されし様子でした。然るに祖母  
 伯父は私を放逐せざるのみか、少しも惡しき顔もせず、却て  
 私を信じ、事の大小に別なく必ず打明け隔てなく勞つて下さ  
 れ、爾來身を以てを導き下されたのであります。私は斯る恩  
 愛の下に漸次性行も一變せしも、生來氣隨氣儘にて、成年に  
 達しても尙容易に矯正が出来ず、却て長の恩愛に馴れ、是等  
 の恩人に向つて愚論を持掛け、東と云へは西と答へ、申すに  
 忍びざる程の迷惑を掛しことも一度二度でありませぬ。従て  
 其年頃以來祖母伯父生存中は、恩義の觀念も、信仰に對す  
 る敬慕の思ひも少しもありません、碌々佛前の禮拜すらなせ  
 しことなし。唯年を取りて居るから斯様に熱心に崇教が出  
 來るのであると思ふて居たのです。今にして考ふれば二方生  
 存中に、若し私が親々佛前の禮拜だけでも致したなれば、ど  
 れ程喜んで下さるか知れぬと思ひます。私が常に祖母伯父に

對するが如き亂暴の態度では、他人は誰も許して呉れませぬ  
 故、其死後は多少氣兼ねの心も起り自身に辛酸を嘗め、苦しみ  
 事物に遂着する毎に思出するは故人のこととあります。ドー  
 考へて見ても通常の人とは一步異なつた所があつたらしい、  
 全く信仰の結果であらふと、初めて私が信仰と云ふことに氣  
 が付き、此苦しき世渡には是非共此信仰を獲得した上でなけ  
 ればならぬと、次第に佛縁に近かせて頂き、所々の佛教講習  
 會に出席し、又好んで信仰書籍を繕き、明治四十一年春近角  
 先生の御尊名を承り、其三四月の交より「求道」を拜讀し、初  
 め先生が御熱心に信仰鼓吹に力めらるゝは全く人間業ではな  
 しと存し、又故人の事なども思ひ合せ、私は切々信仰の光明  
 に憧かれ、此年六月信仰上の煩悶を初め、一小康に安じ、七  
 月一日先生に御目に掛り、御親切なる御教化を蒙り、鹽飽島  
 法然聖人御舊跡參拜にも御伴をさせて頂き、其後は地方にあ  
 りても御信者には求めて御目に掛り、自身も大層信者氣取り  
 て此年を暮しました。私は御慈悲を頂きたりと餘程力んで居  
 たりしが、次第に其箔は剝げかけ、衷心何となく不安の念が  
 障り疑問は絶へず心に浮びます。然し此角目は自然に取れる  
 ものであると紛らしても見ました。

私の接し奉りし信者は皆偉大なる方許りにて、其溫容は如  
 何にも尊く感ぜらるゝ。然るに私は斯く信仰生活をなすと雖、  
 一向詰らぬ御話にならぬ故に、皆様の如く尙一層有難い信仰  
 に入りたいたと、心中慚らぬ感は失せませぬ。其後先生に御目  
 に掛る毎に御教化を受け、自身も切々求道に傾心致して居た  
 のであります。或る年先生に「私は妻子兄弟にも打明られぬ







講話

佛智不思議

「親鸞聖人の消息」

(昨年末末道學舎日曜講話)

近角常観

殊に此の暮は私は何とやらん心が「らく」である。こは何故かと申しますに、何も人生的に喜ぶ可き事が有る譯では無い。唯、今迄多くの方にお慈悲をお話しするにつけ、いつも何とやらん之を知らし度いと思ふ事が、人に届かず人に分らず。又私としては、此の事を「慈悲の上より是非仕途げ度いと思ふ事柄があり、まだ、こんな事では」といふ思ひがある爲め、お慈悲に夜が明け喜ばせて貰ひながらも、思ふやう心が「らく」で無つた。處が此頃に至り、多年間思うて居つた其の時節が至り、御縁が熟して来たといふ感じが有るからであります。勿論斯く申すも私のする事としては、御存知下さる會館の事もあり、其他思想上考へて居る事も多々あるのであります。何となく此の暮は夫れが氣に懸らず暮させて貰つて居る事である。又皆さん御銘々の方にも定めて同感の方ある事と思ひます。殊に日頃深くお慈悲をお喜びの方とか、又昨今来てお喜び下された方などには、夫れ、御一人々々々

に、夫れ、の年末の御喜びが有る事と思ふ。兎に角過去を思ひ現在を思ふと、一方ならず廣大のお慈悲を蒙る事を感謝させて頂く事でありませう。

夫れに就き今日の題は「佛智不思議」と出して置きました。こは近頃暇にまかせて、親鸞聖人の御手紙、——『末燈鈔』や『御消息集』に在る御手紙を拜見するに、親鸞聖人の「佛智不思議を信ぜよ」との御示しが如何にも有難く、夫れをば御話仕度いと思ふ事でありませう。殊に『末燈鈔』などには「他力には義なきを義とす」——他力には我々凡夫の計ひは入らぬ、佛智不思議の御計ひて下さるのである、との御教化をあれ程迄に繰返し、叮嚀にお示し下されてある。之を何も今日に限らぬのでありますけれども、近頃喜びの餘り、御話仕度いと思ふのであります。

三

先づ何より言はんか、聖人の御手紙をどれこれ無しに話さうかと思ふのであります。先づ其の一つを拜讀する事に致します。聖人の御手紙には言ふに言へぬ味ひのあるところがある。先づ『末燈鈔』の御消息に、  
かさまの念佛者のうかひとほれたること……  
笠間は常陸稻田の向ふにある、あの笠間である。其の笠間の念佛者の伺ひ問はれたる事、といふのであります。

……それ浄土正宗のころは、往生の根機に他力あり、自力あり。このことすてに天竺の論家、浄土の祖師のおほせられたることなり。まづ自力とまますことは、行者のおのの縁にしたがひて、餘の佛號を稱念し、餘の善根を修行してわが身をなのみ、わがばかりのこころをもち、身口意のみだれ

こころなつくるひ、めてたうしなして、淨土へ往生せんとおもふを自力とまますなり。……

先づ自力といふは身口意の三業の亂れ心を取り繕ひ心を清らかにして、餘の佛の名號を稱念し、諸の功德善根を修して、行者の夫れ、の縁に随つてやるが自力の道である。

……また他力とまますことは、彌陀如来の御ちかひのなかに、選擇攝取したまへる、第十八の念佛往生の本願を信樂するを、他力とまますなり。……

今日では初めから他力本願は斯く、であると話しても、分るのであるけれども、親鸞聖人の御時代では先づ、自力と他力、阿彌陀佛と餘佛との區別から知らしめ下されて、而も其の阿彌陀佛は選擇本願の、殊に此の罪深き者を助ける爲めの廣大の御心なる事を著しく顯はし下されたのである。て先づ、「他力と申すことは」と事々しく際立て下されて、其の他力とは彌陀佛の廣大なる御誓ひの中に、罪惡の衆生を助くる爲めに凡ての行法は皆な之を選び捨て、唯南無阿彌陀佛の一行を選び取つて下されたる、其の選擇攝取の第十八の念佛往生の本願を信樂する——即ち之を頂かせ貰ひ、信じたる有様を他力といふと、御示し下されたのである。一寸茲で「……を信樂するを他力と申す」とは、一寸考へて他力とは佛のち力である。故に第十八の念佛往生の願を、直ぐ他力とあつてもよさうなものであるのに、「信樂するを他力と申す」とは、親鸞聖人の御示し下さる他力の味ひは、之を頂き信じて初めて「自力で往けるので無い全く佛の他力である」と分るのである。即ち他力とは信じた者より言ふ言葉である。即ち信じて初めて他力と分るのである。未だ信ぜず横から眺めて、他力とい

ふ事は無い。私共が第十八願の遣る瀬無きお心を頂きてこそ成る程廣大の佛心であると、初めて他力を拜むことが出来るのである。此の遣る瀬無きお力を信じた處で、初めて他力なのである。

四

次に

……如来の御ちかひなれば、他力には義なきを義とすと、聖人のおほせことにてありき。……

第十八願をお示し下さるなり、直ぐ此の「義なきを義とす」のお言葉が出て来るのである。即ち此の他力の教へは、佛の方より見捨てぬとの遣る瀬無き御誓ひなれば、佛の御計ひ佛の思召してある。故に我々に於て兎斯うの計らひを用ひず、佛の廣大なる御計らひに計らはれ參らす處が、他力の有難き處である。故に「他力には義なきを義とすと聖人の仰せ事にてありき。」

……義といふことは、はからふことばなり。行者のはからひは自力なれば義といふなり。他力には本願を信樂して、往生必定なるゆへに、さらに義なしとなり。……

即ち義といふは計らふ言葉である。行者の計らひは自力なれば義といふとは、我々が「こんな事では仕やうが無い」「もつと善く仕なければならぬ」「こんな浅間しき事では」又「十方衆生どんなに罪深くても助けて下さるのである」など、思ふ行者の計らひは、皆な是れ私の自力の計らひである。故に此の計らひを總て義といふ。然るに他力は遣る瀬無き佛の本願を信じて、其の本願一つで往生必定、毫も自力の計らひ雜はらざ



る處なるが故、「更に義無しとなり」であります。

……しかればわがみのわるければ、いかで如来むかへたまはんとおもふべからず、凡夫はもとより煩惱具足したるゆへに、わるきものとおもふべし。

凡夫は固より煩惱具足したる者故、之は初めより悪しき者なのである。故にこんな悪しき事では、往けぬと思ふ可らず、其の悪しき、淺ましき者を悲憐し給ひて、其處を佛兼ねて知召して煩惱具足と仰せられたる事なれば、悪しきが悪しきと頭下げて、其の者を助けるとの大悲の仰せなのである。又「自分では之が大分よい、之なら大丈夫である、之なら往生間違ひ無い」と思ふ可らず。即ち

……わたがこころよければ、往生すべしとおもふべからず。自力の御はからひにては、眞實の報土へむまらるべからざるなり。行者のわが／＼の自力のほからひにては、懈慢邊地の往生、胎生疑城の淨土まで、往生せらるゝことにてあるべきぞと、うけたまはりたりし。

今度は、自分が計らひて善き心を起し、自分で努めてする自力の善では、「懈慢邊地の往生、胎生疑城の淨土までぞ往生せらるゝ事にてあるべし。」——こは『和讃』に

願力成就の報土には、自力の心行いたらねば、大小聖人みなながら、如來の弘誓に乗ずなり。

大小の聖人、如何なる智者聖者が如何なる修行をなされても自力の心行では、眞實報土には至られぬ。如何なる方でも此の遣る瀬無き加來の親心を頂いて、往生せられるのである。他の『和讃』には又

像法のとさの智人も、自力の諸教をさしおきて、時機相應の法なれば、念佛門にぞいらたまふ。

大のお心との事である。故に我々此の廣大の佛の名前の南無阿彌陀佛の謂はれを聞く一念に我々の心に其の親の心が届いて下さる。茲になると、「この故に善き悪しき人をさらはず、煩惱のこゝろを隔てずして、往生は必ずするなりと、知るべしとなり。」——茲は『歎異鈔』にも

彌陀の本願には老少善惡のひとをえらばれず、たゞ信心を要とすとしるべし。そのゆへは、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまざるべき善なきゆへに。惡をもをそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへにと。云云。

聖人も「善き悪しき人をさらはず、煩惱のこゝろをえらばずへだてずして」とお示し下されてある。私は人に隔て心と常に言ふのである。夫れは實際自分が人に隔てゝ分るのであるけれども、聖人の善き物にも斯くお示し下されてある。斯く「善き悪しき煩惱の心を隔てずして、」——阿彌陀佛のお慈悲の前には、善いの悪いのといふ區別は無い。太陽の前には電燈もランプも用をなさぬ如く、其の代はり大悲の前には悪しきが故に助からぬといふ事は無い。煩惱が有ればこそ、其の有るのが不慙で助くるとの仰せてある。故に『歎異鈔』には佛かねて知し召して、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりと知られて、いよ／＼たのもしくおぼゆるなり。との御教化であります。

六

とあります。故に行者の自力の計らひにては、「懈慢邊地……往生せらるゝにてあるべきと、承はりたりし。」である。

次ぎには 五

……第十八の本願成就のゆへに、阿彌陀如来とならせたまひて、不可思議の利益はましましな御かたちを、天親菩薩は盡十方無碍光如来とあらはしたまへり。このゆへによきあしき人をさらはず、煩惱のこゝろをえらばず、へだてずして、往生はかならずするなりと、しるべしとなり。

阿彌陀佛とは、十方衆生を助くるに、選擇攝取の南無阿彌陀佛の佛の名號を以て助けるとの廣大の悲願を起し、其の願成就せずは佛とはならぬとの誓ひをお立て下されて、遂に其の願成就の故に、阿彌陀とはならせ給ひ、不可思議の利益極りましまさぬ形である。て全體我々は、阿彌陀佛有りや否やなどの思ひを起すのであります。阿彌陀佛とは此の本願成就の處より現はれ下され、不可思議の利益極りましまさぬ方なのである。て天親菩薩は此の御姿を、盡十方無碍光如来と現はし下された。故に我々、阿彌陀佛とは如何なる人かなど、何か阿彌陀佛ありて後にお慈悲が有るやうに思ひ、阿彌陀佛の存在でも先づ確められたら、など思うのであります。けれども——こんな事を申して嘸ぞ聞き苦しき事と思ひますけれども、阿彌陀佛が分つて後ちのお救ひては無い。阿彌陀佛とは此の罪業の私を助くると態々現はれ下され、其の者を名號を以て救ふとの、其の廣大の悲願成就の結果現はれ下されし不可思議の利益極りましまさぬ御形が、阿彌陀佛なのである。て我々阿彌陀佛と承はるなり、此の罪惡の私を捨て給はぬ廣

……しかれば患心院の和尚の往生要集には、本願の念佛を信樂するありさまをあらはせるには、行住坐臥をえらばず、時處諸縁をさらはず、とおほせられたり。

ぢつとして居ても、歩いて居つても、座つて居つても、寝て居つても、居る處と時とを嫌はず、南無阿彌陀佛々々と念佛喜ぶのが、行住坐臥時處諸縁を嫌はず念佛を喜ぶのである。之につき入らぬ事ではありますけれども、此の間私は夜或る所に講話に参りて何ういふ事か其の歸りに非常に有り難く、南無阿彌陀佛々々と念佛稱へつゝ歸つて来た。心の中で「全體自分は稱へかたが少ない。播州の故後藤祐護師は常に袂の中に念珠を入れ置き、夫れを爪繰りつゝ、日に六萬遍も念佛を稱へられた。私は夫れを現に見せて貰ひ居り、又一方親鸞聖人も常に念佛の行者々々と仰せられて、念佛を稱へぬといふ事は無い。故に之を稱へさせて貰ふより有難い事は無い」と思ひて、外套のポケットに念珠を入れ、夫れを爪繰りつゝ、南無阿彌陀佛々々と稱へ、「あゝ有難い」と言つて来た。して電車に乗つた處が、何うも思ふやうに旨いこといかぬ。今度は念珠を袂に入れて、口の中で頻りに稱へて居ると、一時間もせぬのに、もう指の先きが痛くなつて来る。「之は入らざる念珠を爪繰る事を止めやう」と、今度は唯口で稱へさせて貰つて居ると、其の中もう夜が遅いのであるけれども、一人の紳士が電車に這入つて来た。と思つて居ると其の方が眞地目に「どこへ御出てましたか」と言はれる。私は何うも其の人が思ひ出せぬ。あとになつて見ると甚だ申譯け無いのでありますけれど、「之はひよつとすると監獄で遇つた人か



も知れぬ、立派な紳士なれども、或は然うかも知れぬ」と、私にはよく然ういふ事があるから、そんな事思つて居ると、其の方が私の側に來て、「近角さん、私は高等師範に居つた時お話を聞いた者で有ります」と言はれる、私はびつくりした。計らんや立派な教育家である。して少時何か聞きたさうにして、頻りにむじ／＼して居られたが、遂に言はれるには、「今春三教會同問題」といふ事がありたが、あれは一體何うですか」と。そこで私も大に意を得て、「イヤあれで有りますか、あれは斯う／＼しか／＼で、其の志しは誠に結構であるも、信仰上甚だ徹底仕無い企である。あれではいかぬ」と申すと其の方も「イヤ私もあの事に就き當時朝日新聞に書いた者でありますが、夫れから段々話がつんで、遂に其の方も途中で電車に乗り替へるを忘れて、三丁目迄一緒に來て仕舞はれ、其處で分れて、夫れから又私は色々其の事を考へ、其の夜頗る有難く愉快に歸つて來た。さてふつと氣がつくと、いつの間にかは、やすつかり念佛を忘れて居る。家に歸りてお勤め仕ようと思ふと、何處へやつたか、念珠も無い。腹でも立てゝの事ならまだしもなれど、大に念佛稱へようと、えらく喜んで最後が、念佛も無ければ、念珠迄無くして居るのである。茲て私は「あ一實に之れぢや、何れ丈け稱へようとしても私事では稱へられぬ念佛である。成る程數多く稱へる人は念珠を離されぬ理屈である」と、深く感じたこととあります。一寸考へると、念佛稱へる事は、其の腹にさへなれば左程困難でも無さうに思はれるのである。私は疾うから此の氣が有つた。常念佛は必ずしも出來ぬで無きも、若し初めたら飯

喰う暇もやらなければ、「うそ」であるとの根性が有つた。處が或時、善導大師の

一心に専ら彌陀の名號を念じて、行住坐臥時節の久近を問はず、念々に捨てざる者、是を正定の業と名く。彼の佛の願に順ずるが故に。

の御言葉で氣がつくと何も力んで晝夜不斷に念佛しなければならぬと仰せ下さるのでは無い、何時思ひ出しても、思ひ出した時は、寝ても起きて、も、行住坐臥時節の久近を問はず、常に思ひ出した時は、必ず念佛を喜ばせて貰ふのであるぞ、との御教化である。て現に先きいふ播州の故後藤師は、日々六萬遍も稱へ、深く感ぜられた時は、夜を明かして稱へて喜ばれた事も有つた。又博多の故七里恒順師は、御承知の如く寝ても醒めても、寝てお出になる時も、口に念佛が絶えなかつたと申すのである。去りながら之が稱へんならんと稱へるに力を入れて稱へるのでは無い。故に「惠心院の和尚の往生要集には本願の念佛を云云」と仰せ下されたは。常に不斷に稱へよと申し下さるに非ず、思ひ出した時は、常に時處諸縁を嫌はず、必ず稱へて喜べとの仰せてあります。

次ぎには

……眞實の信心をえたるひとは、攝取のひかりにおさめとられまいはせたりと、たしかにあらはせり、しからば無明煩惱を具して、安養淨土に往生すれば、すなはち無上佛果にいたると、釋迦如來ときたまへり、しかるに五濁惡世のわれら、釋迦一佛のみことな信受せんこと、ありがたかるべしとて、十方恒沙の諸佛證人とならせたまふと、善導和尚は釋したまへり。釋迦彌陀十方の諸佛みなおなじ御こゝろにて、本願念佛の衆生には、かげのかたちこそ

へるがごとくして、はなれたまはずとおかせり。しかればこの信心の人を、眞の佛弟子といへり。この人を正念に住する人とす。この人は攝取してすてたまはざれば、金剛心をえたる人といふなり。この人を上人とも、好人とも、妙好人とも、最勝人とも、希有人ともいふなり。この人は正定業のくらゐにさだまれるなりとしるべし。しかれば彌陀佛とひとしき人とたまへり。これ眞實信心をえたるゆへに、かならず眞實の報土に往生するなりとしるべし。この信心をうることは、釋迦、彌陀、十方諸佛の御方便よりたまはりたるとしるべし。しかれば諸佛の御をしへをまゐることなし。餘の善根を行ずる人もまゐることなし。この念佛する人をにくみする人も、にくみすることあるべからず。おはれみ之なし。かなしむこゝろをもつべしとて、聖人はおほせことありしか。あなかし／＼。佛恩のふかきことは、懈慢邊地に往生し、疑城胎宮に往生するだにも、彌陀の御ちかひのなかに、第十九第二十の願の御おはれみにてこそ、不可思議のたのしみにあふことにてさふらへ。佛恩のふかきことそのきはもなし。いかにいばんや眞實の報土へ往生して、大涅槃のさとりをひらかんこと、佛恩よく／＼御案ともさふらふべし。これさらに性宿房、親鸞がはからひてまふすにはあらす候。ゆめ／＼。

建長七年乙卯十月三日

愚 禿 親 鸞八十書之

如何にも聖人の御心のまゝを、自由自在にお示し下されてある。苟も此の廣大の親心を頂き念佛する者が、他の念佛をせず餘の善根を行ずる者を輕んじ、諸佛の法を誹るといふ事は無い。今自分が斯く有難き念佛のお慈悲を頂く事を得たといふのも、諸佛が各自分／＼の教法より引き寄せて下されたからである。『和讃』に

三恒河沙の諸佛の、出世のみもとにありしとき、大菩提心おこせども、自力かなはて流轉せり。

其の諸佛長々の御導きにより、今日阿彌陀佛の本願を頂けば、其の頂きた者が其の諸佛の法を誹るといふ事は無い。却つて

其の諸佛の法の人が、此の念佛する者を憎み誹る、其の憎み誹るを憎みそする事あるべからず、哀れみをなし、悲む心を持つべし。決して其の人を惡しざまに思ふてはならんと親鸞聖人はお示し下されたのである。こは常に私が言ふ有難き處にて、即ち『御消息集』に「朝家の御爲め國民の爲め、念佛を申し合はせ給ひ候はゞめでたくさふらうべし」が之がある。即ち『御消息集』に「大師聖人の世に念佛をとゞめられた處が、世に色々くせ事が起つた、故に此の念佛停止の時代でも、之に對して往生治定の人は、佛の御恩を思召さんに、御報恩の爲め、世の祈りに心を入れ、世の中安穩なれ、佛法弘まればがしと朝家の御爲め國民の爲め、念佛申し候べし」が茲から出て來るのであります。又次ぎには「佛恩の深きことは、懈慢邊地に往生し、疑城胎宮に往生するだにも云云」——こは實に有難きお示しである。私は茲の此の御一言で、懈慢邊地疑城胎宮の化土往生の眞の味ひを知らせて貰ひたのである。夫れは十年前の『求道』第一巻に誌してあります。

八

其處で話しが色々になりますも茲て一寸、我々は、邊地懈慢疑城胎宮の化土に生ると思ふと、何となく極樂の牢獄に入る事の如く感じ、恰も佛智不思議を疑つた佛罰を蒙る事のやうに思ひ、何と無く化土往生を自力々々と、唯惡しざまにけなして仕舞ふ間違ひがあるのである。全體我々が化土に往生するとは、何うかと言ひますに、化土に往生させて長く困らせて置くとの思召しは無い。此世でまだ充分信心徹到せぬ者を今度は其處に連れ行きて、此の我が眞實の親心を徹到



させて遂には第十八願の眞實報土に連れゆかんと阿彌陀佛の遣る瀬無き思召しが、二十、十九の願なのである。故に十九二十の願を一般に自力といふ。成る程佛の眞實を頂かずして疑つて居るのであるから、悪い事は、大に悪い。去りながら其の悪い疑つて居る者を何故佛は化土に往生させて下さるか。若しや此の大悲の十九二十の願無かりせば、化土にも往かれぬ疑惑狐情の我々なのである。人間にしても、我々が人を疑ひ隔て悪しざまに思つて居る。其者に對して一方が「そんな者は放つ置け、捨て、仕舞へ」といふ丈けなれば、長く縁切れになつて仕舞ふ丈けで、其者の疑ひの取れるといふ期は有る事無い。處が一方が如何に疑はれ、悪しざまに思はれても、其の者が悪しく思へば思ふ程、益々之を哀れみて疑はず隔てず、最後には疑ひながらでもよいから、茲迄來て居れと、引き寄せて下さる、其の廣大の思召して、遂には一方の疑ひも晴れて仕舞ふのである。其の如く今阿彌陀佛の十九二十の本願は、邊地懈慢疑城胎宮の七寶の牢獄に入れるとの思召しては無い。如何に疑ひながら、如何に隔てながら、設ひ盡十方無碍光佛のお姿を化佛と見て居る者でも、其の者を飽迄見捨てず、飽くまで我が手の届く處にとめ置いて、其の者に我が大悲心を知らせずには置かぬとある佛の御誓ひが十九二十の願である。即ち念佛しながらも、未だ信心未了の故に、やる瀬無き御救ひに洩るゝを哀れみて、其の者の爲めに重ねて斯くお建て下されたが、十九二十の願である。然るを今日では、大抵の者が、「十九二十の願は、あれは自力ぢや、牢行さぢや」と思つて居る。そこで聖人は其處をお知らせ下されて、「佛恩の

「先づ自然法爾章」は、皆さん御存知の名高き御教化である。夫れには、

自然法爾事

自然といふは、自はをのづからといふ、行者のほからひにあらず、然といふはしからしむといふことばなり。しからしむといふは、行者のほからひにあらず、如來のちかひにてあるがゆへに、法爾といふ。法爾といふは、この如來の御ちかひなるがゆへに、しからしむるを法爾といふなり。法爾は、この御ちかひなりけるゆへに、おほよそ行者のほからひのなきを以て、この法の徳のゆへにしからしむといふなり。すべて人のほはじめてほからざるなり。このゆへに義なきを義とすとしるべしとなり。自然といふは、もとよりしからしむといふことばなり。彌陀佛の御ちかひの、もとより行者のほからひにあらずして、南無阿彌陀佛とたのませたまひて、むかへんとほからせたまひたるによりて、行者のよからんとおほしからんとおほはねを、自然とは申ぞとさしてさふらふ。ちかひのやうは、無上佛にならしめんとちかひたまへるなり。無上佛とまふすは、かたちもなくまします。かたちもましまさぬゆへに自然とはまふすなり。かたちもましますとすは、無上涅槃と申さず、かたちもましまさぬやうをしらせんとて、はじめて彌陀佛とまふすとき、ならひてさふらふ。彌陀佛は、自然のやうをしらせんれうなり。この道理をこへつるのちには、この自然のことば、つれにさたすべきにあらざるなり。つれに自然をませば、義なきを義とすといふことば、なほ義のあるにあらべし。これは佛智の不思議にてあるなり。

正嘉二年十二月十四日

愚禿 親 總 八十六歳

直ぐと此の通り、佛の廣大の御計らひ——此の阿彌陀佛の本願は此の罪惡の私を捨てぬとの、佛の廣大の御計らひなる事を示し下されてあるのである。即ち此の淺間しき此の者を捨て給はぬは佛と佛との廣大の計らひにして、人間の私の方にて計らう可き事に非ずと。總て聖人の御手紙は皆な此の通

深き事は、懈慢邊地に往生し、疑城胎宮に往生するだにも……不可思議のたのしみにあうことにて候へ。——即ち自力で念佛して居る者でも、十九二十の願の御恵みて邊地懈慢疑城胎宮に往生し、遂には眞實報土に到らせて貰へるである。即ち親の手織りは、いや／＼でも着させて貰ふて居る中に、手織りの親心の有難き事を分らせて下さるのである。「佛恩の深きこと其のきはも無し、いかに況んや……これさらに性信房、親鸞が計らひにて申すには非ず候。ゆめ／＼。——これは性信房に下された御手紙であるからである。斯くの如き調子で、聖人の總ての御消息があるのである。殊に何れを頂いても、「義無きを義とす」の御言葉があるであります。序に、今夏求道會の時拜讀した大心海の釋の處に

有念に非ず、無念に非ず、尋常に非ず、臨終に非ず、多念に非ず、一念に非ず、云云。

といふ言葉があるのである。之れにつき此の夏の時は申すのを忘れたのであります。矢張り此の『未燈鈔』の初めの處に、「有念無念事」といふ御教化があるのであります。

九

さて已上は『未燈鈔』の第二通目の御消息に就き、お話ししたのである。其の他に此の『未燈鈔』の中には猶ほ色々の御消息がある。「自然法爾事」「諸佛等同と云事」「誓願名號同一事」「佛智不思議と可信事」等、色々の御手紙があるのであります。而して何れを頂いても、佛智不可思議の廣大なる事を示し下されてあるのであります。爾下は「義なきを義とす」といふ御教化のある、殊に有難い分丈けを拜讀させて貰つて見ると、

りなのである。

一〇

又此のあとの方に在る「誓願名號同一事」といふのは、『歎異鈔』の第十一章と同じなのであります。『歎異鈔』の十一章よりも、聖人直々／＼の御消息で御示し下さる時は、又一際有り難いのである。夫れは

誓願名號同一事

御ふみくはしくうけたまはりさふらひぬ。さては、この御不審、しかるべしとおぼえず候。そのゆへは、誓願名號と申て、かほりたること候はず。誓願をばなれたる名號も候はず、名號をばなれたる誓願も候はず候。かく申候もはからひにて候なり。たゞ誓願を不思議と信じ、また名號を不思議と「念信」となへつるうへは、何條わがはからひないたすべき。き／＼わけ、しりわくるなど、わづらはしくはおぼせられさふらふらん。これみなひがごとにて候なり。……

茲の一節の御教化が殊に有り難いのであります。夫れは、誓願をばなれたる名號も候はず、名號をばなれたる誓願も候はず候。——即ち親心を離れて、親の手織りの着物は無く、手織りの着物を離れて、親の親心は無い。といふも是れ畢竟理屈であつて、即ち「斯く申し候も、計らひにて候なり」である。即ち此の一枚の手織りの着物は、此の外の着物着られぬ者に着せて下さる親の親心の不思議、手織りの不思議と信じて、一念南無阿彌陀佛と稱へつる上は、何條我が計らひをいたす可き、聞き分け、知り分くるなど、是れみてひか事にて候なり」であります。次して

……たゞ不思議と信じつるうへはとかくの御はらひあるべからず候。往生の業にはわたくしのほからひはあまじく候なり。あなかしこ／＼。たゞ如來にまかせまいらせおほしますべくさふらふ。あなかしこ／＼。



猶ほ此の「はし書き」に

このふみをもて、ひとくにもみせまいらせたまふべく候。他力には義なきを戦とはまふしさらふなり。

とありて、茲にも「義なきを義とす」との御言葉が出てあるのである。斯く聖人御晩年の御消息は、皆な此の調子で、實に頂く度びに有難いのであります。

又此の直ぐ次ぎの御消息にも、

御智不思議と可信事。

御ふみくはしくうけたまはり候ひぬ。さては御法門の御不審に、一念發起信心のとき無碍の心光に攝護せられまいらせ候ゆへに、つねに淨土の業因決定すとおほせられ候。これめてたく候。かくめてたくはほほせ候へども、これみなわたくしのはからひになりぬとおほえ候。……

信心頂いた〜と言ひて、信心頂いたのはよけれども、動もすれば、頂いた〜と言ふ信心は、皆な私の計ひになる。此の遣る瀬無き慈悲の事を、一分一厘でも私で計つてはいかぬ。

真にお慈悲に夜が明けたなら、最早や頂いた〜と、煩はしく言ふにも及ばぬ事である。

またある人の候なること。

出世のころおほく、淨土の業因すくなしと候なるは、こゝろえがたく候。出世と候も、淨土の業因と候も、みなひとつにて候なり。すべてこれなまじぬなる御はからひと存候。御智不思議と信ぜさせたまひ候ひなば、別にわづらばしく、とかくの御はからひあるべからず候。たゞ如来の誓願にまかせま

聖人の御消息は總て此の通り、どれ見ても「義無きを義とす」「佛智不思議の廣大な御計らひに任かす」といふ事ばかりをお説き下されてあるのである。私が何程申しても、茲の味ひは口で言ひ盡す事出来ぬのであります。

一三

さて其處で際立て、申すに、聖人が斯くお示し下さる計らひは、我々が善し悪しといふ善惡の計らひである。我々が善き事せなければならぬと思ふも計らひなれば、悪い事してはならぬと思ふも、計らひである。猶ほも一步深くお話すれば聖人の滅後には、此の自力の計らひが非常に多かつた。今朝勤行後にもお話した事であるが、兎角此の他力の味ひは、うつかりすると計らひにおち易いのである。て現に親鸞聖人の御時代でも、二つの傾向があつた。夫れは、我々若し眞に此の淺間しき私を捨て給はぬ廣大のお慈悲と夜が明けて、彌陀の誓願不思議に助けられ參らせて、往生をば遂ぐると信じた一念には、おのづから南無阿彌陀佛々々と、口に念佛が現はれて下さるのである。即ち眞にお慈悲に夜が明けたものなら必ず念佛は稱へさせて貰へるのである。處が茲に二つの弊を生じて、即ち今日で言へば修養風の間違ひと、實験風の間違である。即ち實験風に陥入つた者に於ては「お慈悲のことは凡て實験でなくてはいかぬ、實験ぢや〜、夜が明けるのぢや、修養ではいかぬ」といふ風になる故、口に念佛稱ふる者を見ては「あれは自力である」といふ。「自力の念佛では地獄に行く、地獄行きは親鸞聖人大の御嫌ひ」といふやうの事になり、最後には、「善導大師法然聖人は自力まじり故崇敬して

いらせたまふべく候。とかくの御はからひもあるべからずさらふなり。なかし〜。

淨 信 御 房

他力と申し候は、兎角の計らひの無くなつた處であると、何れを頂いても皆な之れである。斯んなことを拜見して居るといつ迄も飽き足り無く難有く、時の經つのを忘るるのであります。

二二

猶ほも一つ次に、信行一念の御消息がある。即ち遣る瀬無き佛のお慈悲に夜の明けたのが信の一念、又其のお慈悲は名號を以て助け給ふとのお慈悲と承はり、思はず口に南無阿彌陀佛と浮んで下されたが行の一念である。其の信行一念の味ひを聖人親しくお示し下されて、

四月七日の御ふみ、五月廿六日たしかに見さふらひぬ。……

之で見ると、關東より四月七日に出された書面が、五月廿六日に京都へ着いたと見えるのである。

……さてはおほせられたること。信の一念行の一念、ふたつなれども、信をはなれたる行もなし、行の一念をはなれたる信の一念もなし。そのゆへは行と申すは、本願の名號を一聲となへて往生すと申すことをきいて、ひとこゑをもとなへ、もしは十念をもせんは行なり。この御ちかひをきいて、うたがふことゝするすこしもなきを、信の一念とまふすなり。信と行と二ときけども、行をひとこゑするぞとてうたがはれば、行をはなれたる信はなしとききて候。また信をはなれたる行なしとおほしめすべし。これみな彌陀の御ちかひと申すことをこゝろうべし。行と信とは、御ちかひを申すなり。穴賢々々。いのち候はば、かならずのぼらせたまふべし。

はならぬ、釋尊は雜行ばとけ故拜す可らず」となつて、總て何でもかても信仰でなくてはいかぬとなつて來たのである。夫れが極端に進んで「我々は攝取の光明に照らさるゝ一念に悟りを開くのである。故に我々悪いから、悪い事を氣にするに及ばぬ。其の悪い者を助けようとのお慈悲である。悪いからこそ、佛は助けて下さるのである。故に勝手に思ひ切り悪い事してよい。」と、遂に悪い事するのが往生の業と説く者を生ずるに至つたのであります。『歎異抄』には明に之を示して下されて、

煩惱具足の身をもて、すでにさとりをひらくといふこと、この條もてのほかにさふらふ。云々。

又

そのかみ邪見におちたるひとありて、惡をつくりたるものをたすけんといふ願にてましませばとて、わざとこのみて惡をつくりて、往生の業とすべきよしをいひて、やう〜にあしざまなることのさこえさうらひしとき、御消息に、くすりあればとて毒をこのむべからずとこそあそばされてさふらふは、かの邪執をやめんがためなり。またく惡は往生のさはりたるべしとはあらず。云々。

處が一方之に對し修養風に傾いた者は「往生の業は一に念佛である。我々は南無阿彌陀佛々々と稱ふる念佛の力で往生させて頂くのである。念佛するから、惡が消え一念に八十億劫の重罪を滅するのである。信心の者自然に腹をも立て、惡しざまなることをおかし、同朋同侶にもあひて、口論をもしては、必ず廻心仕なければならぬ。」と、此の二つの傾きを生じ



て來たのである。之に對し親鸞聖人が思ひ切つて御自身の御自督を披瀝なされたる御教化が『歎異鈔』になる。即ち第二章

親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀に助けられまいらずべしと、よきひとのおほせをかうふりて、信するほかに別の仔細なきなり。

親鸞に於きては、唯南無阿彌陀佛一つを以て、此の罪深き者を助け給ふといふ善知識の仰せを頂き、夫れを唯有難うと頂かせて貰うた丈けである。

念佛は、まことに淨土にむさるゝたねにてやはんべらん。また地獄におつる業にてやはんべらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。

我々『歎異抄』を日比拜讀するに、此の處など唯何氣なくすらく、拜讀して居るのであります。實に當時に在りては、茲など大問題であつたのである。即ち一方念佛は淨土の業である、淨土に生るゝ種であると稱へる者がある。念佛は淨土の業故と稱へたり、我々念佛すれば氣が「らく」になり、心持がよくなる故、念佛を稱ふると稱ふるのでは、念佛が自力の善を行ずると同じになる。すると一方は之に對して、「そんな風に念佛に力を入れて念佛すると邊地に墮ちる、地獄に行く、念佛は地獄行きの業ぢや」と言ふ。之に對して聖人のお示し下された處が、即ち今の『歎異抄』第二章の「親鸞に於ては、唯念佛して彌陀に助けられ参らすべし」との法然聖人の仰を頂い

て夫れを信するばかりである。念佛が果して往生淨土の種であるや、又地獄行きの業になるか、そんな事は總て親鸞に於ては知らぬ。たとひ法然聖人に欺かれ参らせて、念佛して地獄に墮しても、更に後悔はせぬ」との御教化なのであります。猶ほ續いて、

そのゆへは、自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄におちてさふらはむこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ。いづれの行もあよび

がたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。彌陀の本願まことにおはしまさば、釋尊の説教虚言あるべからず。佛説まことにおはしまさば善導の御釋虚言したまふべからず。善導の御釋まことならば、法然のおほせをらごとならんや。法然のおほせまことなれば、親鸞かまうすむね、またもてむなしかるべからずさふらふ歎。

動もすると先き申した信の一念の間違ひより釋尊は難行、ぼとけてある。善導法然は禮す可らず」が出て來るのである。之に對して眞實信の味ひの上より、聖人斯くはお示し下されたのであります。すると又一方からは「そんな勿體ない事があるものか、そんな事言ふは南無阿彌陀佛の廣大の謂はれを知らぬからである、念佛を稱へなくては可かぬ、惡を恐れざるは本願ほこりとして往生叶はぬ」といふ者が出て來る。夫れ故最後に

惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐる程の惡なきが故に。

のお教化が出て來たのであります。

#### 一四

そこで度々申す事なれども、要するに斯く我々は、善い事をすればよい、悪い事を仕てはならぬといふ、考が抜けぬのである。是れが即ち善惡の計らひ心であります。處が盡十方無碍光如來の廣大のお光りの前には、如何なる善も光りを失ひ、又惡しき者程彌々衰はれとの、廣大の仰せの前には、旭に雪の消ゆるが如く、如何なる惡業の者も、何の力もなくなつて仕舞ふのである。して此の廣大の大悲の前には、善も何の邪魔にもならぬば、惡も何の障りにもならぬ。全體我々の善し惡しと言ふのは、自分なるものを物差しとして、自分の善いと思ふのが善い、悪いと思ふのが悪いと思つて居るのである。私など慈悲の上より事をさせて頂きつゝ、いつの間にか信仰上よりするのだと、丸て自分が佛になつて仕舞ひ、佛のまことを我が物顔にして、自分が善い事仕て居ると思ふて居るのである。親鸞聖人の仰せには、

まことに如來のお恩といふことをばさたなくして、われもひともしあしといふことをのみまうしあへり。聖人のおほせには、善惡のふたつ總してもて存知せざるなり。そのゆへは、如來の御こゝろによしとおほしめすほどにしりとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおほしめすほどにしりとほしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごとたはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにおはしますとこそ、おほせはさふらひしか。云云。

我々には總て善し惡しは知れぬ、唯此の者を兒捨て給はぬ廣大の佛のお心のみが、眞のおまこと、大善大功徳であるとお示してあります。即ち我々のする事思ふ事は皆な以てそらごとたはごと、其の者が唯佛の廣大なる親心一つを頂かせて貰ふばかりである。即ち他力には義無きを義とすである。よつて斯く頂かせ貰ふと、遺る處のものは、唯佛智不思議、誓願不思議、名號不思議、遣る處は唯此の御不思議の外無いのである。我々に於ては、唯、もう何の計らひもなく、此の不可思議を頂かせ貰ふ外無いのである。段々斯くなだらかに頂き來る時は、喜び極り無い事であります。

#### 一五

猶ほ最後にも一つ、六七年前の『求道』に「人生の歸趣は佛天の御計らひなり」といふ文章を書いた事がある。其時は深く感づる事有つて書いたのであります。此のお慈悲に人生の夜が明けると、もう信仰を頂いたと、夫れから後の人生の出來事を、何もかも佛天の御計らひと言ふは分らぬのである。殊に親鸞聖人が佛天の御計らひとお示し下されたは、非常の場合に御示し下されたのである。即ち親鸞聖人が、此の廣大の佛のお慈悲をお知らせ下されて、爲めに流罪に逢ひ、遂に東國に趣きて、長々眞宗を開く御苦勞を爲し下された。成る程茲迄は、御一身の御苦勞は申すに及ばぬ事ながら、先づ順當にお進み下されたのである。處が茲に於て遂に大挫折を來たしたのである。夫れは、夫れ程聖人が東國で御苦勞下された聖人の生命は、「此の佛智不思議、誓願不思議、名號不思議、之が何より有難い、之を頂かずに念佛すると自力になりて化士に行



き、之を頂いて念佛する者は眞實報土に生れさせて貰へるのである。其の化土に行く者も又最後には佛智不思議で助けらるゝのである」と、此の佛智不思議を届けようとして仕て下されたのが聖人一代の御苦勞である。聖人にすれば、之が何よりの生命であつたのである。然るに聖人が其の後、京都にお歸りになると間も無く、其の東國で聖人が折角お示し下された事が亂れて来て間違ひが起り、色々になつて仕舞つたのである。而して其の間違へた者は、親鸞聖人の御子善鸞上人を始めとして、總て皆な聖人の御弟子方であつた。之には如何な聖人も突き當り給はざるを得ぬ。て今も申す『歎異鈔』未文の御言葉、

聖人のおほせには、善惡のふたつ總じて存知せざるなり……まことにおほしますところ、おほせはさふらひしか。まことにわれもひとそらごとをのみまうしあひさふらうなかに、ひとつのいたはしきことのさふらふなり。

我々の爲る事なす事は、皆なそらごとたはことであるも、其の中にも殊に一つの痛ましき出来事が起つて来た。夫れは何か、といふに即ち

そのゆへは念佛まうすについて、信心のおもむきをもたかひに問答し、ひとにもいひきかすると、ひとのくちをふさぎ、相論のたゝかひかたんがために、またくおほせにてなきことを、おほせとのみまうすこと、あさましくなげき存じさふらふなり。このむねをよくくおもひとさこゝろをらるべきことにさふらふ。

世の中にそらごとたはことはあるも、彌々最後の之れ一つと

に御はからひさふらふべし。慈信坊かまふしさふらふことなたのみおぼしめして、これより餘の人を強縁として、念佛ひるめよとまふすこと、ゆめくまふしたることさふらふ。きはまれるひがごとにてさふらふ。この世のならひにて、念佛をさまたげんことは、かれて佛のときをかせたまひて、さふらへば、なごろきおぼしめすべからず。やうく慈信坊かまふすことを、これよりまふしさふらふ御こゝろえさふらふ。ゆめくあるべからずさふらふ。法門のやうもあらぬまにまふしなしてさふらふなり。御耳にきいれらるべからずさふらふ。きはまれるひかことどもきこえさふらふ。あさましくさふらふ。入信坊なんども、不便におぼえさふらふ。鎌倉にながわしてさふらふ。不便にさふらふ。當時それもわづらふてぞ、さてもさふらふらん。ちからをよばずさふらふ。奥那のひとく、慈信坊にすかされて、信心のみなうかれあふておぼしめさふらふなること、かへすくあはれにかなしうおぼえさふらふ。これも、ひとくをすかしまふしたるやうにきこえさふらふこと、かへすく、あさましくおぼえさふらふ。それも日ごろ、ひとくの信のさたまらず、さふらひけること、あらはれてきこえさふらふ。かへすく不便にさふらひけり。慈信坊かまふすことによりて、ひとくの日ごろの信のたぢるきあふておぼしめさふらふも、誣ずるところは、ひとくの信心のまことならぬこと、あらはれさふらふ。よきことにてさふらふ。之れを、ひとくこれよりまふしたるやうに、おぼしめしあふてさふらふこそ、あさましくさふらへ。日ごろやうくの御ふみどもを、かきもちておぼしめしあふてさふらふかひもなく、おぼえさふらふ。唯信鈔やうくの御文どもは、いまは誣なくなりてさふらふとおぼえさふらふ。よく、かきもたせたまひさふらふ法門は、みな誣なくなりてさふらふなり。慈信坊にみなしたるがひて、めでたき御文どもは、すてさせたまひあふてさふらふときこえさふらふ。誣なく、あはれに、おぼえさふらへ。よく、唯信鈔後、物語なんどを、御覽あるべくさふらふ。年ごろ、信ありとおぼせられあふてさふらひけるひくは、みなそらごとにてさふらひけりと、きこえさふらふ。あまさましくさふらふ。なにこともくまたくまふしさふらふべし。

正月九日 眞淨御坊

親 闕

いふ佛のお慈悲に間違ひを生じて来た。之れ程世の中に痛ましき出来事は無い。人間で言うても、どのやうに艱難苦勞しても、夫れが仕甲斐があるならば、そらごとたはごと、言はれても、まだ仕やうが無いでも無からうも、如何に間違ふと言つても、聖人の仰せて無き事を、仰せと言ひ振らし、人を惑はす者を生じて来た。之れでは、ぢつと仕て居られぬと、『歎異鈔』の著者が奮起して筆を取つて書かれたものが一部の『歎異鈔』である。而して此の間違ひが、聖人の御子善鸞上人を始め、總て御弟子方の手て仕出かされたのである。如何な聖人も之には突き當りなされしならんと思はるゝのである。聖人の御一代を考へて、流罪の事はあるも、外に之ぞと言ふ處は見つからぬが、之には聖人も屹度突き當りなされたらんと思はるゝ。而して此時の御消息に今の「佛天の御計ひ」なる御言葉が現はれて居るのである。之を思ふと、此の御消息が、一入難有く頂かるゝのである。て今其の御消息を拜讀すると

さては念佛のあひだのことによりて、ところせきやうにうけたまはりさふらふ。かへすくこゝろくしくさふらふ。誣ずるところ、そのところの縁ぞつさせたまひさふらふらん。念佛をさへらるなんどまふさんこと、ともかくもなげきおぼしめすべからずさふらふ。念佛とやめんひとこそいかになりさふらへ。まふしたまふひとば、なにかくるしかるべき。餘のひとく、縁として、念佛をひるめんとはからひあはせたまふこと、ゆめくあるべからずさふらふ。そのところに念佛のひるまりさふらふらんことも、佛天の御はからひにてさふらふべし。慈信坊がやうくにならせたまひさふらふよし、うけたまはりさふらふ。かへすく不便のことにさふらふ。ともかくも佛天の御はからひにまかせまいらせたまふべし。そのところの縁つておぼしめさふらふらば、いづれのところにても、うつらせたまひさふらふておぼしめすやう

一人に信仰を碎かれたやうに思ふも、要するに本當のところが頂けて居無いから動くのである。却つて本當で無き事が現はれ結構である」との御言葉である。之なども佛智不思議の廣大なる事を思ひ、聖人の御示し下さる佛天の御計らひの味ひを話したのであります。私は今から申せば昔の事でありましても、或時人に信仰を屈け度いと思つて、何うしても夫れが人に徹せず、人が受けて呉れぬ。其の時此の御消息を讀み、或る程聖人にも斯る時あつたかと、深く感じた事であつた。處が丁度今日は其の人が喜び下さる時機に向つてある如く思はれ、近頃斯くならだらかに喜ばせて貰うて居る事であります。斯く頂けば、『教行信證』總序の

然れば則ち淨邦縁熟して、調達開世をして逆害を興ぜしめ淨業機彰はれて、釋迦華提をして、安養を選ばしめたまへり。

世に如何に淺間しき出来事起り来るも、此の廣大なる佛天の御計らひと頂けば、萬づのことは皆なもてそらごとたはごとまことあること無きに、唯念佛のみぞまことにまはしますである。今日は何となく歳晩に臨み、聖人の晩年の御心持を偲び奉り度き思ひになり、斯くは御消息に就き、佛智不思議を仰ぎ奉りた次第であります。猶ほ『和讃』奥書きにある『八十八歳御筆』の文が有り難いのである。序に拜讀させて頂く

獲の字は因位のときうるを獲といふ、得の字は、果位のときにいたりてうることを得といふなり。名の字は、因位のときのなを、名といふ、號の字は、果位のときのなを號といふ、自然といふは、自ほおのづからといふ、行者の



はからひにあらす、しからしむるといふことばなり。然といふはしからしむといふことば。行者のほからひにあらす、如來のちかひにてあるがゆへに。法師といふは、如來の御ちかひなるがゆへに、しからしむるを法師といふ。この法師は御ちかひなりけるゆへに、すべて行者のほからひなきをもちて、このゆへに他力には、強なきを義とすしるべきなり。自然といふは、もとよりしからしむるといふことばなり。彌陀佛の御ちかひの、もとより行者のほからひにあらすして、南無阿彌陀佛とたのませたまひて、むかへんとほからひせたまひたるによりて、行者のよからんと、あしからんとおほほを、自然とはまうすぞと、ききてさふらふ。ちかひのやうは、無上佛にならしめんと、ちかひたまへるなり。無上佛とまふすは、かたちなくまします。かたちましまさぬゆへに、自然とはまふすなり。かたちましますとせしめずとせば、無上涅槃とはまふす。かたちましまさぬやうをしらせむとて、はじめて彌陀佛とぞ、きならひてさふらふ。彌陀佛は自然のやうをしらせんれうなり。この道理をこころえつるのちには、この自然のことば、つねにきたすべきにはあらざるなり。つねに自然をたせば、義なきを義とすといふことは、なほ義のあるべし。これは佛智の不思議にてあるなり。

まことのこころなりけるを、  
善惡の字しりがほは、  
おほそらごとのかたぢなり。  
是非しらず、邪正もわかぬこのみなり、  
小惡小惡もなけれども、  
名前に人師をこのむなり。

同じく義なきを義とすの御示してあります。(大正元年十二月廿九日)

近時諸方面に御縁熟して、知人並に先輩の家庭で、法を聞いて下さる人が多くなつて來た。而して何處に参りても私の言ふ處は、一つである。即ち人間は家庭、健康、財産、事業、又は精神上等何等かの上に、必ず欠けた一點があつて、夫れに行き當ると、如何なる人でも動かれぬ處が出來て來る。而して其の欠けたる點に向つて、涙を流して下さる人が佛である、との事のみを私は申して居るのである。人間は自ら考へ一點の不満足なしと思つて居る人でも、必ず何處かに仕て見やうなき點がある。現に最近話に行つた家など、位置あり財産あり身分あり名譽あり、學問あり、修養あり、人生的には申分なき家なれど、母御が御病氣の爲め、充分安心をなさらず爲に私を招かれたのであつた。斯く設ひ自身は充分であつても、思はぬ處に私では仕やうの無い處が出來て來る。して其處を佛が助けると言つて下さるのである。設へば醉漢が人と喧嘩をするには、必ず引つ掛りにする處がある。其の如く、今佛が私を哀れみ慈光中に引き入れて下さるは、夫れが何であれ其の仕て見やうなき處を引つ掛りにして、遂には攝取光中に收めとつて下さるのである。

# 佛敎通信講義

この講義完了の後は各科目別冊として製本し得べく、内容は何れも言文一致の平易なる文體を用ひ、何人にも讀み得る様、各講述者に執筆を求め、殊に半數以上の科目には全文振り假名を附け其他の科目と雖も平易懇切を専らとしたれば未だ佛學に指を染めざる人にも會得し易かるべし。されば一寺院の子弟にして普通中學又は師範學校等に從學するもの、二自坊にありて法務に從事し餘暇を以て宗餘乘を修めんとするもの、三寺院住職又は布教者にして復習又は參考に資せんとするもの、四副住職并に住職試験の受験者にして參考書を得んとするもの、五信徒にして宗意を了得し法味を愛樂せんとするもの、六殊に町村教育に從事し又は地方の公吏たる向の公務の餘暇、教義に通曉せんとするもの、尙地方青年團夜學會等の諸團體には最も適切なる參考資料なり。▲送金申込は振替口座大阪三一四七番本山出納部依用ありたし▲

入會金 金參拾  
一ヶ月分 金貳拾七  
三ヶ月分 金八拾  
半年分 金壹圓六拾  
一年分 金參圓拾

## 第一年年義講義

淨土文類聚鈔講義	講師 吉谷 覺壽
御文要義(振假名付)	講師 中島 覺亮
眞宗要旨(同)	講師 上杉 文秀
七祖概要	講師 河野 法雲
正信偈講義(振假名付)	講師 住田 智見
眞宗史	講師 山田 文昭
高僧和讚講義(振假名付)	講師 河崎 顯了
修養講話(同)	
佛世尊の誕生に就て	講師 南條 文雄
二菩薩の引導	講師 河崎 顯了
七十五法名目達意	講師 舟橋 水哉
起信論講義	講師 大須賀 秀道
布教資料(振假名付)	委員 擔當
質疑應答	講師 擔當

玄舍序	擬講 稻葉 圓成
俱舍宗	擬講 舟橋 水哉
法律宗	擬講 内記 龍舟
三相宗	擬講 小島 惠見
三論宗	擬講 稻葉 圓成
天台宗	擬講 本多 主馬
華嚴宗	擬講 花山 大安
眞言宗	學師 隈部 慈明
禪宗淨土宗	學師 古澤 文龍
國體と佛敎	文學博士 三浦 周行
社會問題殊に勞働問題	文學博士 神戶 正雄







前號要目

求道

◎悲歎述懐

講義

◎『教行信證』信卷三信釋

近角常觀

第五席 至心釋(永劫の修業)

告白

◎二郎は死して活躍せり

秦敏之

一 二郎の死

二 二郎に對する追懷

三 心機一轉

四 無常を感ずるは厭世にあらず

◎姪靜子に與ふる書信

黄葉秋造

雜錄

◎無慚錄

近角常觀